



雅言成彙

下卷

和  
11

ホ 2  
392  
2



利  
391  
2

東京大学  
学芸部  
蔵

ホ 2  
392  
2

雅言成法下卷目錄

第八標	轉訛	初丁
第九標	清濁互訛	十六丁
第十標	約言	十七丁
第十標	舒言	廿一丁
第十一標	軼事	廿九丁

雅言成法下卷

目一

轉事 廿六丁

一 雅言 十一丁

二 雅言 十一丁

三 雅言 十一丁

四 雅言 十一丁

五 雅言 十一丁

六 雅言 十一丁

七 雅言 十一丁

八 雅言 十一丁

九 雅言 十一丁

十 雅言 十一丁

十一 雅言 十一丁

十二 雅言 十一丁

十三 雅言 十一丁

十四 雅言 十一丁

十五 雅言 十一丁

十六 雅言 十一丁

十七 雅言 十一丁

十八 雅言 十一丁

十九 雅言 十一丁

二十 雅言 十一丁

二十一 雅言 十一丁

二十二 雅言 十一丁

二十三 雅言 十一丁

二十四 雅言 十一丁

二十五 雅言 十一丁

二十六 雅言 十一丁

二十七 雅言 十一丁

二十八 雅言 十一丁

二十九 雅言 十一丁

三十 雅言 十一丁

三十一 雅言 十一丁

三十二 雅言 十一丁

三十三 雅言 十一丁

三十四 雅言 十一丁

三十五 雅言 十一丁

三十六 雅言 十一丁

三十七 雅言 十一丁

三十八 雅言 十一丁

三十九 雅言 十一丁

四十 雅言 十一丁

四十一 雅言 十一丁

四十二 雅言 十一丁

四十三 雅言 十一丁

四十四 雅言 十一丁

四十五 雅言 十一丁

四十六 雅言 十一丁

四十七 雅言 十一丁

四十八 雅言 十一丁

四十九 雅言 十一丁

五十 雅言 十一丁

五十一 雅言 十一丁

五十二 雅言 十一丁

五十三 雅言 十一丁

五十四 雅言 十一丁

五十五 雅言 十一丁

五十六 雅言 十一丁

五十七 雅言 十一丁

五十八 雅言 十一丁

五十九 雅言 十一丁

六十 雅言 十一丁

六十一 雅言 十一丁

六十二 雅言 十一丁

六十三 雅言 十一丁

六十四 雅言 十一丁

六十五 雅言 十一丁

六十六 雅言 十一丁

六十七 雅言 十一丁

六十八 雅言 十一丁

六十九 雅言 十一丁

七十 雅言 十一丁

七十一 雅言 十一丁

七十二 雅言 十一丁

七十三 雅言 十一丁

七十四 雅言 十一丁

七十五 雅言 十一丁

七十六 雅言 十一丁

七十七 雅言 十一丁

七十八 雅言 十一丁

七十九 雅言 十一丁

八十 雅言 十一丁

八十一 雅言 十一丁

八十二 雅言 十一丁

八十三 雅言 十一丁

八十四 雅言 十一丁

八十五 雅言 十一丁

八十六 雅言 十一丁

八十七 雅言 十一丁

八十八 雅言 十一丁

八十九 雅言 十一丁

九十 雅言 十一丁

九十一 雅言 十一丁

九十二 雅言 十一丁

九十三 雅言 十一丁

九十四 雅言 十一丁

九十五 雅言 十一丁

九十六 雅言 十一丁

九十七 雅言 十一丁

九十八 雅言 十一丁

九十九 雅言 十一丁

一百 雅言 十一丁

雅言成法下巻目録

雅言成法下巻

轉訛上の轉換の餘ハみれ訛とさだめて今姑轉訛と云これみる後まいとゆる音便なり但し其中女ををんな臣を  
 おんと云類ハんをさごらふむと呼ときハみむ音通ひ又  
 后をきさい朔をついとちといふ類ハいき韻通へバ此等  
 ハ音韻相通ふよりて訛れりと見ゆまバ此類をバ前の訛  
 通の標中又舉べき理なりと思ふべけれどをべて音便ハ  
 音韻の相通又關らば多ゆめて呼を主とをることなれば  
 おくこめて皆此標中又收つ其證左又舉るごとし  
 〇いよくづれとる音便の例

○つきうちついでち朔さきつころさいつころ先頃さき  
 はひさいはひ幸きさきさい后なきがしろないがしろ  
 茂れきすれい少かきまみかいまみ垣間見をきがき  
 いがき透垣つきひぢついで築土つぎまつついで  
 松かみあきかうい髪擇つきかさねついでかさね衝重  
 きがはふいかう吹革さきくささくさくさ  
 ちいご地名あきさあいご地名秋田たきさみねいさみ地名置賜つ  
 き地名ついき地名築城あきまあいま地名當麻さきさまさいさま地名玉埜  
 地さきさき地名いべ地名雀部ほきさほい地名穂北など云類あ  
 便なれ下土ハ雅言下ハ音これらハ體言のきをいとい

をるなり。ひさしきひさしい久とほきとほい遠ちあきち  
 ろい近よきよい吉あしきあしい凶なを云類も多し。これ  
 らひひさしくひさしうとほくとほうちあうよく  
 ようあしくあしうなども云定よて用言のきくをいうよ  
 くづしとるなり。  
 ○ゆきてゆいて行ぬきてぬいて貫たきてたいて置ひき  
 てひいて引たどろきてたどろいて驚つぎてついで續つ  
 ぎつついづ次第など云類も多し。これらハ用言のきをい  
 といへるよてくをうといへることハなし。  
 ○まいてまいて益いさいていさいて致いさいていさ

て活など云る類もあり。これらの用言のしをいと云るよ  
て。今一きははいやくきこえとり。されどむげよ近き頃云  
出しとろことよハあらびや、古くも見えとり。

ハうよくづれとる音便の例ハ、  
○かがふりかうむり冠と云ハ、體言のかをうといへるれ  
也。

○とくめとうめ專かくかう斯かぐをとかうばく替わら  
ぐつわらうづ草鞋志とぐつ志とうづ襪子など云類あり。  
これらの體言のくをうといへるなり。字音の簡子カクシをか  
く拍子ハツシをはうしるど云も同也。とほくとほう遠ちろくち

ら引近など云類ハ、用言のきくをいりどくづも云定也。  
て前よ云る如也。

○ははきはうき伯耆又篇ふきがはふいがう吹革カクかはだうか  
うどろ革堂かはのかうの河野かはほりかうもり蝙蝠フクロな

ど云類あり。これらハ體言のはをうといへるあり。  
○まひとまうと真入マコトたひとたうと首あきひとあきうど  
商人とびひととびうど旅人タビかりひとかりうど獵人カたと

ひとたとうと弟ケイいもひといもうと妹イモからひつからうつ  
韓櫃カンをうひつをううつ折櫃セなど云類あり。これらハ體言  
のひをうといへるあり。たまひけりたまうけりたまひて

さまうて賜いひていうて云たもひてたもうて思おひて  
 おうて追とひてとうて問あひてあうて逢とがひて志  
 とうて従かひてかうて買はひてはうて遠など云類あ  
 り。これらハ用言のひをうといへるなり。  
 ○まへつきみまうちきみ卿と云ハ體言のへをうといへ  
 るなりつゝへまつるつゝうりまつる仕奉と云ハ用言のへ  
 をうといへるなり。  
 ○なからひなりらひ直會ななくなり直衣など云類あ  
 り。これらハ體言のほをうといへるなり。  
 ○たほみわたほう木大神かみのとのかうのとの頭殿か

みつけかうづけ土野こみちとうち小路てみづてうづ手  
 水かみへかうべ頭かみうきかうがい髮搔とみうみと  
 とうらみ畳紙なむ云類あり。これらハ體言のみをうとい  
 へるなり。  
 ○ひむらひう日向かむなびかうなみ神並とむのみね  
 とうのみね多武峯とむけとうげ峠かむれぎかうなき巫女  
 ど云類あり。これらハ體言のむをうといへるなり。さむら  
 ふさうらふと云ハ用言のむをうといへるなり。  
 ○たそしまはたそさう御座ば給の  
 まふのとうぶのたまはく宜のさうまく宜など云類あり。こ

さらハ用言のまをうといへるあり。  
 ○こりでとりて取出と云ハ用言のりをうといへるあり。  
 ○まるづまうづ詰と云ハ用言のりをうといへるあり。  
 云んよくづれとる音便の例  
 んハ全鼻より出る聲よして口の音は非を餘の五十音ハ  
 口を全閉てハ出ざるよんハ音のみハ口を緊しく閉ても  
 出るふより皇朝のもとよりの正しき音の外よてとハ孤  
 立るるガ故よ上古の言ハんの音あることなふこれふよ  
 して漢字のんの韻なるをばもとよりの漢籍よてハ  
 本のまよんと呼ハる轉してさだらよむと呼ハる詳ハ

らざれども此方の古書よハ其韻のやハ近きまよハにみ  
 ぬむの四種よ定めて用られとたをえて所念君爾故余  
 漢などの類ハんの韻をに用ひ鬱瞻和斲などの類ハん  
 の韻をみよ用ひ珍海敏馬などの類ハんの韻をぬよ用ひ  
 品陀感玖などの類ハんの韻をむよ用ひられとり。此他集  
篇來師管家万葉よ與曹丹店など見えてりハるなどの韻ハ  
轉してとれる類ハあれどそはまハくのことなり又地名  
の假字などよハ韻をさまハくハ轉して用ひとること  
あるも所以あることよて其ハ皆件の四種の外なりさて  
 んハ正しき音ならずみれ音便なるら歌の詞書物語文  
 ちどこそあれ後世んと云ことようるそしき歌詞などよ  
 てハ中古までもみれむとさだらよ呼ハるるべとさてそ

の音便よん<sup>〇</sup>と云こと。いつの時よりはトまれるそと云よ。  
よ<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>ね<sup>〇</sup>ど。奈良の御代のかぎりハ。いまどは  
るさまの音便ハ見えぬ。古今集序詞書などよ。音便よん<sup>〇</sup>と  
呼<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>と見ゆること。これ<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>大<sup>〇</sup>抵<sup>〇</sup>大<sup>〇</sup>同<sup>〇</sup>弘<sup>〇</sup>仁<sup>〇</sup>の頃よ  
り<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>そ<sup>〇</sup>め<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>思<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>。す<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>。さて今ハ平假  
字片假字などよて。さ<sup>〇</sup>ぶ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>呼<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>ム<sup>〇</sup>とかき。鼻かけて  
呼<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>。ど<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>。り<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>こと<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>  
と<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>文<sup>〇</sup>字<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>こと<sup>〇</sup>ハ。中古平假字世ヨ行を  
れて後までも。な<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>其<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>だ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>こと<sup>〇</sup>。余ガ考あり。それ  
よ<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>きて論あり。漢字三音考末ヨ云るやう。或人云。古言ヨ

ン<sup>〇</sup>の音あ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>云<sup>〇</sup>べ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>。今世ヨン<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>呼<sup>〇</sup>ぶ<sup>〇</sup>音<sup>〇</sup>ハ。古<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>ン<sup>〇</sup>  
と<sup>〇</sup>呼<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>なり。然るよ。古書ヨハ<sup>〇</sup>そ<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>皆<sup>〇</sup>ム<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>書<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>ハ。そ<sup>〇</sup>れ  
ら<sup>〇</sup>み<sup>〇</sup>ン<sup>〇</sup>の音ヨ書<sup>〇</sup>べき假字のなり。し<sup>〇</sup>故<sup>〇</sup>なり。と云ハ非な  
し。若<sup>〇</sup>古言ヨン<sup>〇</sup>の音あら<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>。ム<sup>〇</sup>の假字の外ヨ其<sup>〇</sup>假字もある  
べきよ。古<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>其<sup>〇</sup>假字なく<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>て。皆<sup>〇</sup>牟<sup>〇</sup>武<sup>〇</sup>等<sup>〇</sup>の假字を用ひて。さ  
だ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>ム<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>呼<sup>〇</sup>ぶ<sup>〇</sup>音<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>差<sup>〇</sup>別<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>。し<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>共<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>だ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>ム<sup>〇</sup>と  
呼<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>故<sup>〇</sup>なり。凡<sup>〇</sup>て古<sup>〇</sup>の假字の用ひさまハ。甚<sup>〇</sup>精<sup>〇</sup>嚴<sup>〇</sup>なり。こ  
とをよ<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>知<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>ハ。疑<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>べ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>。上<sup>〇</sup>この或人の説ヨ。古  
書とさまもの。万葉よりあな<sup>〇</sup>このをいへる。又ハ和名抄  
などの類をいへる。さ<sup>〇</sup>ハ<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>へ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>。故<sup>〇</sup>よ。その



さばとこも詳まハ知られ祢ど若奈良朝よりあれとの  
をさしていへアとあるときハもほてそののみハ鼻のけ  
てんと呼し證なけれむ今世のさまふ引あてとさば上古  
のこを臆度よいへるのみなればかよく論は足ば若  
今京よりこあるのを云らるらば古今集ハ大御をおほむ  
臣をおむるとあるとぐひハ神を轉てかむつといかむ  
なからるどいへるとハさまかちりて音便よおんおん  
と呼しことあるけまど音便よんと呼とさざうまむと呼  
とそののみ文字よ書りけし證なれずんと呼をも皆む  
と書らるん音よ書べき假字のなるり故ありと云る

も真よさることるりあるを本居氏の或説をあるがち  
よもどきて若シの音あらばムの外ハ其假字あるべきよ  
皆牟武等の假字を用ひしハ其よさたらよムと呼し故な  
りといへるハこれも或説の古書とさばものを万葉より  
あれとのをいへること見定めての論なるべけれど實  
まはることありよハあまどいさのいひとらとぬが故  
みまぎらちいよよと云よ和名抄よ載とる國々の郷名  
の中よ川人加波無土間人万無止大庭於保無波稻庭伊奈  
無波度津和多無都高渠太加無曾攝津國郡名東生比牟我  
志奈里などの類をりく見えとるこの無牟等の音便よん

と呼しことあるけきどそのらみんの音よあつべき假字  
 のるうりし故よ借て書るものなれば或説よ古書とさ  
 せるものを和名抄などの類と見るときハむげよ非<sup>トカ</sup>なら  
 ざいもれさることなるを無牟等の字を用ひさるらハ  
 さだらまむと呼べきことなりとてこれらをもむとさざ  
 ろよ呼ときハとがへることありはる上よ云るごと  
 くうるそよき歌詞るむなりがこそあらめかの和名抄の  
 頃ハ地名等ハことよ音便よまれなべて世よ呼るれさる  
 其まよを正さざるもとるよてんと呼ぶ言出来て後よ  
 もさだらよ呼むよとらつべき文字のなき故よ此等の

字を借て書るものなるをや

○たほにべたほんべ大贄かにもりかんもり掃部多には

多んば丹波なにはなんば難波かにはさかんば蟹は

にふはんぶ植生くにさきくんだき國たほにはたほん

ば大庭いなにはいなんば稻庭はにいはん土師なにぞ

なんぞ何いらにぞいらんぞ如何ちどの類ありこれらハ

體言のにをんといへるなり

○たほみたほん大御たみたん臣をみなをんな女あそみ

あそん朝臣きみさちきん公等かみさちべかん公さち

め上達部なみなんだんど渡たもみたもん重かるみを

かろんぞ 地名 浪坂 ふとがみふとがん 地名 上  
 名 地名 三上 地名 三上 地名 高渠 地名 高渠  
 うんぞ 地名 深渠 地名 深渠 など云類あり。これらハ體言のみをんといへ  
 るるりのみてのんで 飲 飲 みて 飲 みて 飲 みて 飲 進かみてかん  
 で 釀 釀 いとみていさんで 婁 婁 よみてよんで 讀 讀 みてよんで  
 清とみてさんで 富つみてつんで 積 積 など云類あり。これら  
 用言のみをんといへるなり。  
 ○きぬがききんが 絹垣 垣 垣 みぬま みぬま 三瀨 三瀨 など云類ハ。  
 體言のぬをんといへるあり。  
 ○かむうぜかん 神風 ひむう ひむう ひん ひん 東 東 ほむだ ほむだ ほ

んだ 譽田 まむど まむど まんだ 茨田 田 田 など云類のむ む だ だ のよ呼  
 べることいちしるきを後よんと訛ていへるなり。此他み  
 むきのむの類を後世ハなべて みんき ん ん など云こと  
 なるれど古ハ皆さごうよむと呼くことあるし其故ハ今世  
 よなん せん せん せん せん せん はん はん など云類の辭を万葉の借字ハ嘗責  
 寒食 サハム 食 食 事と書ること多きを思ふべし。上古ハ漢字のん ん の韻  
 をさへに みぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 轉して用とるよて嘗責 サハム 寒食 寒食 をん ん せ  
 ん せん せん せん はん はん よ借るよハあらざるを知べし。又 みむ みる みる みる みる のむ  
 のむよ六 牛 鳴 鳴 などの字を書るも同くことなり。其餘辭の  
 む む をめ め む む もよも通む む いていへること。集中よ多きを思



○ねもころねんころ懇と云ハ、體言のみをんといへるま  
 じ曇をども店をてもし轉し用とる類とい反なり。カハサ  
 ○かりなかな假字志りとり志んどり後取のこりのゆ  
 き残雪のこんのゆきくづりのごとくだんのごとく如件  
 わさうつわさんづ度津地名かりとかなど川田地名云類ハ、體  
 言のりをんといへるなり。さりぬるころさんぬるころ法  
 なりぬるんぬ成をなりぬをんぬ畢るど云類ハ、用言の  
 りをんといへるなり。群をくり篇をへりし轉し用ひとる  
 類とい反なり。よんのおと夜御殿と云ハ、體言のるを  
 ○よるのねといよんのおと

んといへるなり。あるめりあんめり有と云ハ用言のるを  
 んといへるなり。訓をくる。駿をけるし轉し用とる類とい  
 反なり。うともんとも二方よくづれさる音便の例  
 ○女ヨメナををうまをんる旅人を多びうど多びんどるど云類  
 也。體言のみひをうともんともいへるなり。仕奉をつらう  
 まつるつらんまつる。飲而をのうでのんでるど云類ハ、用  
 言のへみをうともんともいへるなり。此類多し。  
 上、件のいうんの三種の轉化ハ、奈良の御時のかぎり  
 也。いまご出来ざりしことなるれば、彼集るをよまむ

又ハ、歌詞ハさらよて、題詞ヨ出スル地名官名氏姓の  
唱、よいとるまで、一もまトふべきよあらざること此  
ろを、常ヨ口語ヨ音便ヨいひるれとることハ、心ある  
人モ、ら、ねえ、ば、どり、を、づ、て、讀、こと、あれ、ど、是、を、  
心を用いて見るときハ、それらの訛言ハ自避る、理  
○ナリ、一、二、い、を、歌の辭のむを、常ヨいんと呼とされ  
きど、知寒、徳食、を、や、う、よ、も、書、と、る、を、據、と、し、て、い、づ  
又、され、も、さ、ご、の、よ、む、と、唱、へ、又、大納言、少納言、正三位、從三  
位、日向、間人、丹波、廣庭、を、どの、きを、い、ひ、を、う、に、を、んと  
い、う、の、小類の音便ハ、後世よとそ口つきされ、い、まだ、當昔

ふハ出来ざりしことなれば、  
べきよあらば、さてこの音便ハ、いつの時よりは、  
わりと云こと、あり、あ、よ、い、志、られ、絲、ども、上、よ、も、云、ご  
とく、大抵、今、京の初つ方より、や、い、ひ、を、め、つ、ら、む、故、古  
今集より、これ、の、歌集物語書、ど、よ、ま、む、よ、これ、ら  
の音便を避むと、して、ハ、却、て、よ、ろ、く、ら、ら、ば、は、る、ハ、既  
く古今集よも、き、さい、さい、を、ひ、ひ、さ、し、う、と、ひ、う、の  
さうぶ、さ、ま、う、け、る、つ、う、う、ま、つ、る、ね、あ、ん、さ、う、め、お、ほ  
んと、き、あ、そ、ん、お、ほ、ん、べ、ら、ど、序文、詞書等、よ、も、見、え、其  
後、か、さ、ら、な、れ、ば、な、り、志、あ、る、を、古風を、ひ、と、へ、よ、ふ、ら

く信ををるともあら。今京よりこれとの歌ふみなど  
よて、必、音便よんといふべきをも、さごのよむと呼を  
よと思ふ。時代の風をよきまへざるひがことれ  
よ、されどうるをよき歌詞などよも、さる音便をま  
へよよみさることなきは、歌をことよ言語のよ  
きもけよて、法式の後までもくづれざるが故なり、  
まよる秋ちのり野のるりよけりなどよめることよ  
あれど、其の物名を隠さむがよめよ、ことよさらよ曲て  
音便よいへるされば、別のことなり、さて勅撰の歌集  
よをら、詞書などよかくさまれ音便あれ、其後の日

○記物語書などよハ多きことさらなり、さるハ日記物  
語ふみなどハそのよみの俗言を其まよいへるこ  
と、ことよ多けよバぞよー○因云、音便のいの下ハ、本  
語と大の清濁の差カヒるハ、うんの下ハ、本語よてハ清  
音なるも、濁らるるも多クハ濁る例なり、日向ヒカをひ  
が丹波をとんばまよがばを濁りて呼ぶごとく、其中  
よりの下なるハ、濁らるるをも清て唱るもまれくあ  
るんの下なるハ、濁らるるを清て唱ることをさく見  
あたらげ、かんよぜなどよを濁らざるハ、ぜよ濁音の  
重なる故るれば別なり、これよよりておひふよ、三種

の音便のうちよ、いハ正しき方ハ近き故ハ本語と清濁大抵異らば、うハ又其次なる故ハ濁る例ことハ多し、んを不正なるがゆゑハ濁らざるハまハ清濁ハ正不正ハ従るものなればなり、さればうとんと二方よくづれとる音便のうち、うと云ハや、正しき方ハ近く、んと云ハ不正なるを譬、飲而など云ことをのうでと云よりハのんでと云方を雅ハと思ふハ、まどへることなり、○因云音便の例ハ本語を詰つを詰めて呼音便の例ハ言ヲ其まも呼つハまど

○やつとやつと叔と云ハ體言のつを詰めていへるなり。

○まひとまつと真人をひとをつと夫にひとにつと新田

まど云類ハ體言のひを詰めてつと云るなりおもひておむつて思ひひていつて云おひておつて追かひてかつて買志とおひて志とおつて隨まど云類ハ用言のひを詰めつとといへるなり、云ハまど云るなり、○とふととつとと貴と云ハ體言のふを詰めてつといへるなり。

○のりとのつと祝詞と云ハ體言のりを詰めてつといへるなり、とりてとつて取よりてよつて依かへりてかへつて却をりてをづつて居又折居又つくりてつくつて作のりとするの



つとる 則ほりまほつを欲るど云類ハ用言のりをつめて  
つといへるなり。

○もちてもつて以うちてうつて打とちてとつて立わ  
ちておろつて分ちど云類ハ用言のちをつめてつといへ  
るなり。

○うとむつめて云つとも二方よくづれとる音便の例  
○真人マヒトをまうとまつと云ハ體言のひをうとむつめて

つともいへるなり。思オモヒテ而をおもうておもつてと云ハ用言  
のひをうとむつめてつとも云るなり。ささくはよんは  
上ウヘ伴つをつめて呼音便ハ殊ハ俗ハきかゆゑ古言ハ

さらなり。中古までも歌集又をとるべき物語おみるど  
よもまゆへとることをさくする。後の軍書又ハ漢  
籍讀と常の俗語よの多し。されがこまハ前のいりん  
の三種の音便の外なり。但これむげは後世は出來と  
るものよも非る。和名抄ハ攝津國有馬郡幡多發近江  
國栗本郡治田多發武藏國都筑郡針ヶ針ヶ佐佐などあるハ文  
字ふよればもとハ幡多治田針ヶなどなりけむを當昔  
世俗は呼るせるまに發多發罰ハツ佐久など註せるならむ  
う。その發罰ハはつとつめて呼しとおもるなり。も  
てさらばハ波都ると書べきことなり。又ハ假字

支らむよハ。かく目遠き字を用むこと。彼書の例はあら  
 ざれむる。志うれバこ此つめて呼つむ。やく古く出来  
 里しものよハあめまど。そはとあく俗呼のまを註せ  
 るものよ。雅語よまドへ用ひしことハ。さらよあらざ  
 里しる。な。この外は。行の半濁の音便。又其餘くさく  
 の音便あれど。雅言よまぎる。ことなきハ。此書よハ畧  
 きていへ。委しきこと。先輩のあらをせる書よつく  
 せればあり。かくて上よ云る如く。音便のうんの下ハ多  
 くハ濁る例なる。このつめて呼つの下ハ。全濁らざる  
 が如くあれども。みれ弾く音よ。常の濁音よりハ。今下

きは正し。あらざるものなり。この故よつめて呼つハ。か  
 さハ。行の濁らる音よつづく言よかぎれるハ。はひ  
 ふハ。はよつづくせきハ。これいへゆる半濁音よ呼る  
 を。かさハ。行よハ。半濁と云ものをるけまど。それもつ  
 めて呼つの下ハ。此半濁よ准る音よ。いと不正なる  
 を知べし。漢籍よても。八音をば。ちん播。笏をこつとさ  
 十はさみなど云類む。つめて呼つハ。いさく不  
 正音なる。うら。つづく言も。濁らる。音よ變をしてハ。呼  
 れぬゆゑ。ことさらよ轉して。弾きて呼るものなり。と  
 知登  
 清濁互訛 清音を訛りて濁音よ唱。濁音を訛りて清音よ唱  
 るを。今姑。清濁互訛と云。其證左よ舉る如し。

清音を訛りて濁音よ唱、とる例

○騒動をバ、佐和久と久を清て唱、を佐和具と濁りて唱、山の枕詞の阿志比紀をバ、比を清て唱、を阿志妣紀と濁りて唱、るハ、みれ後の訛るリ。

濁音を訛りて清音よ唱、とる例

○瀧をバ、多藝と藝を濁りて唱、を多伎と清て唱、加具山をバ、具を濁りて唱、を加久と清て唱、後世ハ、常ニ清て唱、地の人ハ、加久山村と今ハ、久を清て呼止し、なり。これ皆後の訛るリ。  
上、件の如く、古、清て唱、を後ハ濁りて唱、古、濁りて唱、しを後ハ清て唱、る類許多ト、委ハ、近世古言清濁考などい

ふいと便よき書あれば、今例をいふまでもるけきバ、そ

際の一、二ツを引出て、其訛るるよ、をいひて止ぬ、いでその

訛るる謂ハ、書紀神武天皇卷ニ、因改號其津、曰肩津、今云、蓼津訛也とあるよ、知ベト、清濁いとみざりよるりと、る後、世の人、心よ、を、字さへ、さへ、を、よ、バ、清濁のことよ、え、さ、ば、ら、り、心、を、さ、へ、き、よ、あ、ら、む、と、か、ろ、く、思、ふ、こ、と、な、め、れ、ど、清濁をとがへ、とるをバ、訛也、と、し、る、さ、れ、と、る、よ、て、古、人、の、言、語、を、精、嚴、よ、し、て、い、と、雅、ハ、か、り、し、を、知、べ、シ、近、き、世、古、學、ひ、ら、け、て、よ、り、古、さ、ま、を、ぬ、く、信、ト、て、言、靈、の、妙、さ、る、を、ち、を、さ、と、り、得、と、る、と、も、ご、ら、ハ、さ、る、あ、や



立るへて唱へこゝろむる。其ハ中々ふことさら  
 めきてふさをしうらげ。廿卷三十一一首東歌。和  
 我伊母故とあるハ。かへて耳立て聞ゆるよて知べ  
 し。それも一本の。和我伊母等とあるハ。穩當るが如し。  
 後世謾よ言を舒約していへど。舒すべき言。約むべき言  
 ならんて。多や多く反切のさだむてこととらハ。のそを  
 らいときことならんや。用言を約めたる例  
 ○倭よ在をやまとなる。ニ。ア。切。ナ。下。吉野よ在をよぬあ  
 松浦よ在をまつらなる。春日よ在をかたかなる。天よ在

をあめなる。葦邊よ在をあへなる。家よ在をいへなる。な  
 ど云る類ハ。在于倭。在于家といふ意よ。ことなることとら  
 なる。れども。短急よ云て宜しき處を。必約めて云るよて。  
 みどりよ心として約めたるよハ。あらば。今こゝろみよ唱  
 へ見よ。倭なる。家なる。なと云ハ。人の解説をまよぼして。在  
 于倭。在于家と自聞ゆることよて。もとよりある云べき語  
 勢なきが。然いへるよて。心まらせよいへるよハ。あらば。さ  
 て又音為よありをおとせなりと云。花よ有ましを。はな  
 ならましを。常石よあるを。ときはるなど云ことあり。こ  
 れも上のやまとなる。いへなるなど云と。反切ハ同理なれ

ども用へるやういさゝら異なるり。おとほなるりハ。音ナド為るよ  
 てありと云意俗ニ音をるぢやはなからまゝをハ。花ハよて  
 有まゝをと云意俗ニ花であらう物ぢときはるハ。常石  
 よてあると云意俗ニ常磐でをるよきこゆることあり。又  
 花のあるときよと云意なるを。はれらるときよと云るこ  
 ともあり。ハ卷廿七丁。花乃有。時ルとあり。後ニ色なる浪  
 意。又春しあれバを。はるされバ。切シ。有ハ有てをありさ  
 りてなご云。又鳴むあましを。なごさま。切ガ。高くあるら  
 しを。なごら。切カ。言痛くありともをこちとありとも  
 上。霞みてあるらむをか。きみとらむ。切テ。なご云る類  
 同。

もあり。又行といふを。ゆくちふ。切カ。零と云をふるちふ。潜  
 くと云を。かづくちふると云る類もあり。このちふを今京  
 ふと云りて。通へるなり。又手折來けるを。とをりける。切カ。使  
 の來ければ。をつらひのければと云ることもあり。此等ハ  
 其處の語勢ハ。應じとよて。あれちよ。約めて云るハ。非  
 ぞ。又消をく消を。け召上を。めさげ。切シ。搔上をか。け  
 など云る類も多し。切カ。搔上をか。け  
 上。件よ引る例ども。皆短急よ云て。宜しき處を。約めて云  
 るよて。此等こと。よ然云。でハ。あらばと云よハ。あらば  
 るとへバ。由久智布比等波とあるハ。必ちふ。とふハ。換云

といえでハ宜しうらぬを廿卷五十一。水鳥乃可毛能羽  
能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布と  
ある歌の等伊布をちふ或ハと云てハふさをしうらぬ  
又吉跡云物曾とあるをバよしといふものそと云ても  
よしちふもの或ハと云ても苦しうらざるが如  
其といづれも此例は准て意得べし又めさげかきげなど  
を必ず約めていひなれりと思ゆるれば舒云てハ宜し  
かぢぢきこゆることもあり兼好ふつれぐ草は古ハ車  
しを今ハ車もてあげよ火かきあげよと云ハいと口を  
よれとるを歎きとるをうるべし阿音を諸音の下いづれ其  
よるして唱へとるをうるべし阿音を諸音の下いづれ其

處の語勢其言のいひるらるるをいふと云ふは應て斟酌あること  
と知べし

舒言

用言を舒する例

○流をなぶらふラフ切ルと云も同ト流をなぶらへ散をちらふ散有  
らへるといふ更をかほらふ更をかえらひと云も同トラフ切  
ふも同ト更をかほらふ切ル下くも同トラフ切  
語をかたらふ歸をかへらふ霧をきらふ繼をつらふガフ切  
繼をつらふヒト云も同トガフ切ミまひマヒ切なご云  
類多しとてこれ舒約の説世はおこなわれて識者等も  
此等を舒云るといふことを意得とめれどその舒する

ゆゑよりのさだまきハ、歌句の言ハ數のとらねむ舒て云、  
 まさ言の數のあまれハ約めていへるよて、實ハ約るも舒  
 るも同トことなるを、心よまうせてともかうもいふこと  
 とさやましく思へるなどよもあらむ、その後世の俗意もて、  
 古人の雅意をうらぶふといふものよて、いとをさるく口  
 をしきことそあし、心まうせよ舒約て云しならバ、上  
 古の歌よ、四言六言などの句ハよむまどき理ちるをもて、  
 ゆゑなくして舒約ハ為ざりしことを思ふべし、故流ハ、そ  
 の流ることを直よいひ、ながらふハその流ることの引つ  
 づきて、絶き長緩しき意味あるときよいふことなりと知

べしとよへ、五卷、迦多良比袁礼騰とある一よて  
 云べし、もしかとりと云ても、かたらひと云ても、舒と約と  
 のさざのみよて、其實ハ、おつるところ同トことなりと云  
 右の歌を、かりよかたりをれどもと換て唱へこゝろみ  
 よ、かたりをれどもと云ても句をなは故よ、異ハあるまど  
 きよ、然云てハ、何とやらむいひとらぬこゝちをるなり、  
 いろよと云よ、いづれよても、語ることよ違ハなけきど  
 も、語ハ直語よさしあて、人よ物を告語よ云こと、かたら  
 ひハ人よむらひて、彼方の言をも此方よ聞入、此方の言を  
 も彼方よ告知せ、

かたらふと訓べき處よ、相語とかきさま  
 とること、古書よ多きも此故なり



さま語ることの引つゞきて、絶を長緩しき意味あること  
 なるべからひと云るよてこそ、物語をることの數々あ  
 りて、盡せぬさまよきこえて、げよさもらくおもをる  
 ことなき、其餘ハこれ一々准ても知べきことなり。又移を  
 うつろふ云ハ同ト。口ハ切リ下同ト。嘖をつゞろふ嘖を  
 まろふカク隠をかくるカクおなと云る類也。上よ云るよ同ト。又  
 住をそまふ切ハ同ト。靡をなびカクふカク黄變をふカクみとひカク  
 嘆をなげカクふカクなと云るも同ト。よ同ト。よカクふカク  
 ○又還をかへカクさふカク還をかへカクさひカクと云も同ト。照  
 をてらさふカク坐をカクまカクさふカク隠をかカクくカクさふカク交をかカクはカクさカクふカクな

ど云ろともあり。此ハ土のかくるふと云とハ、自他の差  
 別あるのみよて、舒云意ハ同ト。かくろふと云とハ、自他の差  
 別を記きまふべし。かくろふハ、隠の舒と云る言よて、他よ  
 り、餘ハ此よ准べし。以上波行ハ活動して舒さる例なり。  
 ○又聞をきカクあカクるカクもカク同ト。嘆をなカクげカクろカクくカク痛をいカクとカクけカクくカク  
 くるカクみカクれカク同ト。戀をさカクひカクけカクくカク繁を忘カクげカクくカク權をうカクれカクくカク  
 けくカク嫉をねカクとカクけくカク安をやカクけカクくカク惜ををカクけカクくカク又申をまカク  
 をさカクくカクるカクみカクれカク同ト。縦をゆるカクさカクくカク晩をくカクらカクさカクくカク御覽を  
 めさカクくカク又不相をあカクはカクさカクくカクるカクみカクれカク同ト。不知を忘カクらカクるカク  
 不鳴をなカクらカクくカク不咲をさカクらカクあカクくカク不有をあカクらカクなくカク不言を

いをさく不<sup>ハ</sup>經<sup>マ</sup>をへなく不<sup>オモハ</sup>思<sup>ハ</sup>をおもはなく又慕<sup>シ</sup>を志<sup>ス</sup>ぬは  
く<sup>ハ</sup>み<sup>コ</sup>な<sup>ク</sup>同<sup>ト</sup>ト<sup>ク</sup>飼<sup>カ</sup>をか<sup>ハ</sup>く思<sup>オモ</sup>をおもは<sup>ハ</sup>く言<sup>コト</sup>をい<sup>ハ</sup>は<sup>ク</sup>通<sup>カ</sup>  
をかよは<sup>ハ</sup>く詔<sup>ミコト</sup>をのり<sup>ト</sup>まは<sup>ハ</sup>く又隱<sup>カクレ</sup>をか<sup>ハ</sup>く<sup>ラ</sup>ク切<sup>キ</sup>ル<sup>ル</sup>  
同<sup>ト</sup>戀<sup>コイ</sup>をこ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く散<sup>チ</sup>をち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く過<sup>ス</sup>をま<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ラ</sup>く在<sup>ア</sup>をあら<sup>ハ</sup>く  
見<sup>ミ</sup>をみ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く逢<sup>ア</sup>有<sup>ル</sup>をあ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く荒<sup>ア</sup>をあら<sup>ハ</sup>く晚<sup>ス</sup>をく<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く  
老<sup>オ</sup>をお<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く立<sup>タ</sup>有<sup>ル</sup>をと<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く居<sup>イ</sup>をを<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く語<sup>コト</sup>をか<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く  
告<sup>ツ</sup>をつ<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く云<sup>イ</sup>有<sup>ル</sup>をい<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く來<sup>ク</sup>をく<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く取<sup>トル</sup>をと<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く令<sup>メ</sup>  
を志<sup>ス</sup>む<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く辭<sup>シ</sup>の氣<sup>キ</sup>流<sup>ル</sup>をけ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く都<sup>ツ</sup>流<sup>ル</sup>をつ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くま<sup>ハ</sup>ど云<sup>フ</sup>る類<sup>ル</sup>  
も多<sup>ク</sup>し、これ<sup>ハ</sup>も上<sup>ノ</sup>の隱<sup>カクレ</sup>をか<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くふ<sup>ハ</sup>と云<sup>フ</sup>例<sup>レ</sup>と、反<sup>サ</sup>切<sup>キ</sup>ハ似<sup>シ</sup>とる  
理<sup>リ</sup>なれ<sup>ド</sup>も、それ<sup>ハ</sup>用<sup>ヨウ</sup>へ<sup>ル</sup>や<sup>リ</sup>異<sup>イ</sup>なり<sup>シ</sup>。此<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くハ隱<sup>カクレ</sup>

る事<sup>コト</sup>がと云<sup>フ</sup>意<sup>イ</sup>なり。見<sup>ミ</sup>ら<sup>ハ</sup>く少<sup>コト</sup>な<sup>ク</sup>戀<sup>コイ</sup>ら<sup>ハ</sup>くの多<sup>ク</sup>きと云<sup>フ</sup>歌  
ハ見<sup>ミ</sup>る事<sup>コト</sup>が少<sup>コト</sup>く戀<sup>コイ</sup>ること<sup>ト</sup>が多<sup>ク</sup>きと云<sup>フ</sup>意<sup>イ</sup>なりよて、其<sup>ノ</sup>餘<sup>ハ</sup>  
准<sup>ス</sup>へて知<sup>チ</sup>べし。故<sup>ニ</sup>ととへむ。花<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く秋<sup>アキ</sup>津<sup>ツ</sup>の野<sup>ノ</sup>へとい<sup>ハ</sup>い  
ど。花<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く秋<sup>アキ</sup>津<sup>ツ</sup>の野<sup>ノ</sup>へとい<sup>ハ</sup>い云<sup>フ</sup>ま<sup>ハ</sup>ど。梅<sup>ウメ</sup>花<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くハ何<sup>ナニ</sup>處<sup>ト</sup>  
とてい<sup>ハ</sup>へど。梅<sup>ウメ</sup>花<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くハ何<sup>ナニ</sup>處<sup>ト</sup>とて云<sup>フ</sup>がと<sup>キ</sup>よて、その差<sup>サ</sup>  
異<sup>イ</sup>を辨<sup>ワ</sup>べし。さてそ<sup>レ</sup>べて用<sup>ヨウ</sup>言<sup>ゴン</sup>の下<sup>ノ</sup>ハ、之<sup>ノ</sup>の言<sup>ゴン</sup>をそ<sup>レ</sup>へい<sup>ハ</sup>  
ぬ例<sup>レ</sup>よて、戀<sup>コイ</sup>るの居<sup>イ</sup>るの立<sup>タ</sup>るのさ<sup>ハ</sup>どい<sup>ハ</sup>ぬこと<sup>ト</sup>なるよ<sup>ハ</sup>ら  
くま<sup>ハ</sup>くさ<sup>ハ</sup>ど舒<sup>ユ</sup>い<sup>ハ</sup>ふと<sup>キ</sup>ハ、各<sup>ノ</sup>別<sup>ノ</sup>のこと<sup>ト</sup>よてを<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>くのお<sup>ハ</sup>く  
ら<sup>ハ</sup>も志<sup>ス</sup>ら<sup>ハ</sup>ば立<sup>タ</sup>ら<sup>ハ</sup>くのと<sup>キ</sup>も志<sup>ス</sup>ら<sup>ハ</sup>ばとも、と<sup>キ</sup>ま<sup>ハ</sup>くお<sup>ハ</sup>く  
し<sup>ハ</sup>きま<sup>ハ</sup>ぎもあ<sup>ハ</sup>るどい<sup>ハ</sup>へること<sup>ト</sup>ありて、その舒<sup>ユ</sup>と<sup>ハ</sup>ると約<sup>ヤク</sup>と

ろと差あるを**知べし**。時云む古今集。櫻花ちりあひく  
 ぶか。又老らくの來むと去りせ。門さしてなり。とこ  
 とへてあえざらましをるど見えとら。と云ら。見ら  
 く戀らくるど云ら。く。と。さ。ら。る。と。見  
 ちぶら。かの古今なる。と。さ。ら。る。と。見  
 へ。ま。と。き。こ。え。さ。り。か。く。て。後。く。多。し。さ。て。万。葉。る。老。ら。く。い  
 本。づ。き。て。老。ら。く。と。い。へ。る。と。後。く。多。し。さ。て。万。葉。る。老。ら。く。い  
 見。ら。く。戀。ら。く。な。る。を。の。り。老。と。の。み。云。て。の。舒。り。と。る。詞。を  
 を。老。ら。く。と。い。へ。る。を。の。り。老。と。の。み。云。て。の。舒。り。と。る。詞。を  
 の。詞。ハ。十。三。八。丁。よ。老。下。惜。毛。と。あ。る。老。ら。く。の。り。出。と。る。言  
 され。バ。必。お。ゆ。り。く。と。後。よ。唱。を。さ。へ。誤。り。と。る。も。の。る。お  
 いら。く。と。必。お。ゆ。り。く。と。後。よ。唱。を。さ。へ。誤。り。と。る。も。の。る。お  
 と。の。老。落。惜。毛。と。云。意。る。バ。老。ら。く。の。り。出。と。る。言  
 と。の。老。落。惜。毛。と。云。意。る。バ。老。ら。く。の。り。出。と。る。言  
 ○又將荒をあれまく下マク切ム將川をからまく將守をモラム  
 らまく將吹をふらまく將告をつけまく將行をゆるまく

將零をふらまく將祈をのまく將散をちらまく將戀を  
 こひまく將見をみまく將問をとほまく將置をたのまく  
 辭の氣牟をけまくなど云る類も多し。とへバ吾戀らく  
 ハ止時もなりと云ハ吾戀ることハ止時もなりと云意通  
 ひけまくハと云ハ通ひけむやうハと云意なるよてむと  
 云とまくと云とをその舒約よりていさの差異ある  
 を知べし。以上可行は活動して舒る例なり。  
 ○採をつまほマク切ム採をつまほと云咲をえまほ踏を  
 ふまほ立をト切ム立をえまほ踏を  
 持をもとそ作をつくらラ切ム作をつくらと取を

たらを釣をつらを振をふらを忘をわをらに守をもらを  
 列をからを嘆をなげのを カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 おのほ間をきろに通をかよを カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 同逢をあを以帯をおを以寝をな カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 下ハ第二位を第四位又為をせ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 舒をたらを格なり カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 る見をめぐ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 訓とるはよりて先輩等と古言見之と書とるを云類なり  
 意得て其定は解来れとるれどもこれを然訓て云云類なり  
 のふときをゆる過去辞といひてはさきぬぬことなり  
 一卷の食國を賣之とまむと二卷は夕されぬぬことなり  
 一巻の食國を賣之とまむと二卷は夕されぬぬことなり  
 之野へは明取もかまむと二卷は夕されぬぬことなり  
 賣之野へは明取もかまむと二卷は夕されぬぬことなり

又おほきみの賣之野へは明取もかまむと二卷は夕されぬぬことなり  
 所聞見為とあるこれめ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 式ハ所知看古語云志呂志米源なるがあるをと思べし カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 等ハつまは採給ふと云意 カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 俗ハ御つみ被成御立被成と云 カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 のまを カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 をお カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 いふ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 便なきことなり カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 で カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 大 カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 さい カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 さ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 と カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 て カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 さ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 し カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ  
 くと カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ カク切ヲ



言を舒て長けく緩ニヤカといふて、大やうの同理なるがらも、まこと  
 こまらよ云ハ、同ト嘆チカくと云言を引ヒキつゞきて絶ツギび嘆チカく意  
 むえよいなげらふと舒いひ、尊て云方ハいなげらひと舒  
 云とろをくらべ見て、其餘ハいづれも此定ニ意得て曉トる  
 べし。かくて前ニも云とろごとく、直語ニ人ニ物ヲを告語ス  
 しかさると云、人ニ對て、彼方の言をも此方ニ聞入、此方の  
 言をも彼方ニ告云、互ニきまハくと語ニ交ハをハ、舒てか  
 らふかさらひと云、さて又尊者の語ニ給ふと云こと、を長  
 けく緩ニ舒て、かハとらハかハさらハはハるハと云、付と短ニらハ急  
 言ハ、態ニ勸ニ云ハよりことおハこれハるハものハ、今、俗ニも、尊

者の上を云ハ、語ヲらせらる、立タせらるなど云も、古言の  
 と此趣を遺せるものと知べし。これより舒と約との差異  
 をあきまハべし。

さゆちまへん  
ふれ敷き敷きさゆちのう映へり  
昔の土音云ふは辯とせよとあるは云ふ古言の

軼事

美と云辭は八差ある事  
語の尾は屬ていふ美の辭は多くハ四段ハ麻美牟米と活  
用く言よて其ハ愛美ウラシ懽美ウレシ痛美イタシ憐美アハシ悲美カナシ惜美ウレシ苦美クルシなどの  
類ハ即五十音の第二位ハ活用けるなり  
四段とハ愛ウラシまむ  
愛ウレシむ愛ウレシめる  
どいふハ餘ハ又中二段まで同トさまよ活用く言もあれ  
准へて知べし  
中二段とハ恨ウラシみ恨ウレシみ  
むなどの類なり  
其ハこととハ出せろ語の尾ハ屬て云  
ると一例なるハ見えば又廣美ヒロシ厚美アツシ高美タカシ遠美トホシ好美ヨシ多美オホシ無  
美ナシ難美カタシ可美ベシ或ハ希見美メッラシ不樂美サガシ鬱美イフカシ佗美ワヘシ凝コバシ美シ險美サカシなど  
いへる類ハ又上件ハ二種  
四段と中  
二段と  
活用の他なり各々言

の起れる理ハ異まりといへども、その本義を明めて解む  
とをるときも、かへして用ひとる末れ意を誤りて、一首の  
うへを聞ひかむることあるふよりて、今ハ混へ解て、其意  
をさとせること左のどと、又引美弛美などいふ美のこ  
ハ別の一格にて、上の例どもとハきよく様異れること、又  
末よ云る如く、思ひまどふべあらば、かくて同一美の辭と  
いへども、前後の調練ふよりてハ、用ひとる意、猶くさぐさ  
聞ゆる處おわくして、まぎらわしきまよりて、集中の歌を  
これのむつみ出で、そのおわらこの意を志るして、讀者の  
手著とに。

○一卷 十五 空蟬之命乎惜美浪尔所濕伊良真能島之玉  
藻刈食 二卷 廿 青駒之足搔乎速雲居曾妹之當乎過而來  
計類 又 三 十 爲便乎無見妹之名喚而云々 とあるハ、既に  
本居氏も説く如く、命乎惜美ハ、俗ハ命ハ惜さよ、足搔乎速  
ハ、足搔ハ速さよと云意ハ、きく時ハ、こよなくやをらあよ  
きこゆることあり、かやうよ用とること、集中ハさらよて、  
後の歌よもことに多ければ、むづらハ、く舉げ、准て知べ  
し、又上よ乎と云辭のまきも同ハ、ことなり、そハ一卷 廿五  
二、暮相而朝面無隱爾加氣長妹之廬利為里計武 三卷 三十  
二、越海乃手結之浦矣客為而見者之見日本思櫃などある



も。朝面無さよ見れば乏しきよと云意よきこえて前なる  
 全同トかやうよ用へること甚多し。其野河遊瀨之  
 早美須史毛不通事無有巨勢濃香毛とあるのみハ甚めづ  
 らしこの例ハ他見あたらひ必遊瀨乎早見とあるべき  
 とこあるはこそあれハハハハ又云く美等とつづけと  
 字なごの寫誤よてもあらむ。又云く美等とつづけと  
 るもあり。四卷十七。獨宿而絶西組緒忌見跡世武為便不  
 知哭耳曾泣十七。多麻豆佐乃使乃家禮婆宇禮之美登  
 安我麻知刀敷爾云く。かやうよつづけなどあるも忌しき  
 よ。喜しきよふと云意よきこえて。下の等の言ハありても  
 なくともあづらぬことなり。又云く美可云く美也云く  
 美許曾云く美叙るど種よ連云とることあれどそれも

雅言成法下卷

下の辭ハあづらぬことよて美の辭の意ハ異ハハ  
 卷十七。吾妹子乎去來見乃山乎高三香裳日本能不見國  
 遠見可聞六卷十四。田跡河之瀧乎清美香從古宮仕兼多  
 藝乃野之上爾廿卷三十一。之麻可氣爾和我布禰波豆都  
 氣也良牟都可比乎奈美也古非都々由加牟六卷四十一。三  
 日原布當乃野邊清見社大宮處定異等霜又廿六。如是為管  
 在久乎好叙靈尅短命乎長欲為流などいへる例多し。唯云  
 氏と云ること万葉よ數首の中一首もあることなり。心  
 つけて見べし。書紀ハ推古天皇卷歌よ。訶之胡弥豆兔伽  
 陪摩都羅武烏呂餓弥豆。これ一あり。  
 兔伽陪摩都羅武烏呂餓弥豆。これ一あり。  
 ○一卷十九。天皇乃御命畏美柔備爾之家乎釋云く。この

雅言成法下卷

け集中巻くといと多く。皆同意なり。さてこの用様前條な  
ると大うと同くあれど。御命の畏さよと云意とハ云べら  
らば。辨巽あるこれハ畏美ハ。俗よ畏まつて。まよ畏んであ  
飛さまなり。これハ畏美ハ。俗よ畏まつて。まよ畏んであ  
どいもむの如く。續紀詔よ。恐坐互とあるも。俗よ御畏まり  
被成てと云むの如く。又畏美等とつゞけとるも同くこと  
なり。三卷丁十三よ。恐等仕奉而云く。十一丁十三よ。皇祖乃神御  
門乎懼見等侍從時爾相流公鴨などある是なり。これ二ッ  
也。  
○二卷丁三十一よ。三五月之益目頬添所念之君與時云く。又  
四十丁若草其孀子者不怜彌可念而寐良武云く。四卷丁十三よ。  
吾妹兒矣相令知人乎許曾戀之益者恨三念三卷丁廿九よ。山

高三河登保志呂之云く。十一丁。眉根搔下言借見思有  
爾去家人乎相見鶴鴨又四十丁。今日有者鼻之鼻之火眉可由  
見思之言者君西在來十二丁廿三よ。淺茅原茅生足踏意具美  
吾念兒等之家當見津十四丁。佐射禮伊思爾古馬乎波  
佐世互已許呂伊多美安我毛布伊毛我伊敞乃安多里可聞  
廿卷丁十四よ。宇流波之美安我毛布伎美波奈互之胡我波奈  
爾奈曾倍互美禮杼安可奴香母などかやうよ用とるな  
甚多し。古事記中卷應神天皇條太子御歌よ。美知能斯理古  
波陀袁登賣波阿良蘇波受泥斯久袁斯叙母宇流波志美意  
母布とあるも同く。これハ目頬添ハ。俗よめづらう。不怜

弥ハさびしうと云意ニ用ひさり。これらめづらさふさ  
 ことなり。いづれもかやうに用ひさるハ皆同意なり。准  
 て知べし。鎌倉右大臣金槐集ニ聲高み蝦鳴り井手の川  
 よりも吾ぞ物思ふ秋の夕ハ又月清み秋の夜いとく更ぬ  
 らし佐保の川原ニ千鳥鳴る。又月清み秋の夜いとく更ぬ  
 師の浦ニ千鳥鳴る。又風寒み夜の更行ハ妹ハ島形見の  
 浦ニ千鳥鳴る。又風寒み夜の更行ハ妹ハ島形見の  
 思むるなり。もてか右大臣ハ古の言の用様をえり  
 出用ひられさる。こと多けれが古の言の用様をえり  
 れらのみハなぐとあらむこそ穩るべけれ。これ三  
 なり。  
 ○二卷丁四ノ敵見有虎可叫吼登諸人之協流麻低爾云々  
 四卷丁三ノ絶常云者和備添責跡焼太刀乃隔付經事者幸

也吾君十一廿九ノ相見欲為者從君毛吾曾益而伊布可思  
 美為也十三十四ノ白妙乃袖之別乎難見為而荒津之濱屋  
 取為鴨十八十八ノ左由理波奈由利毛安波牟等於毛倍許  
 曾伊麻能麻左可母宇流波之美須禮などある敵見有ハ俗  
 又あさんごる。敵を見とると云難見為而ハかさんトてと  
 云意なるよ。いづれも准ふべきことなり。後世言ニ安んぞ  
 る。難んぞる。或ハ重んぞる。輕んぞるなどいふも安んぞる。  
 難みぞる。あるハ重みぞる。輕みぞるといふことの類れと  
 る。よて同意なるを知べし。續紀三卷詔ニ勞弥重弥所念坐  
 漆と同格にて勞しり重り御念し坐といふ意なり。志る  
 を本居氏詔詞解ニ右の難見為而とあるを引てこの勞弥

重跡をど云ると同く用ひざるなるよしいへるはくそし  
ら重んじて畏坐とい天地心乎勞美重美畏坐とあるを  
ふ意よもきこえたり土左日記に心ち惡みしてとかける  
も全同格の用様なり又西行が撰集抄に清涼紫宸の間よ  
やまみし給ひて百官よいつられさせ云く又いつくまや  
をみする人よると尋ね給ふよ云くなどあるも同じ法師  
えやももれ古言の用ひざるをえり出ていひとるこ  
とのあれをさてか清涼紫宸の間よやまみし給ひ  
てとあるを本居氏が安見知之といふ枕詞の例は引合せ  
てそのこととれりこといももてとがへることとるく  
を考へて辨知べし詞解これ四なり  
○三卷八丁二不見而往者益而戀石見云く名積叙吾来並  
二又四丁十日足木能石根許其思美管根乎引者難三等標耳

曾結馬四卷廿四丁今夜之早開者為便乎無美秋百夜乎願  
鶴鴨十五丁伊毛爾安波受安良婆須歎奈美伊波彌布  
牟伊故麻乃山乎故延互曾安我久流廿卷廿九丁之良奈美  
乃與曾流波麻倍爾和可例奈波伊刀毛須倍奈美夜多妣蘇  
互布流十卷三丁天漢湍瀨爾白浪雖高直渡來沼待者苦  
彌十七丁九和我夜度能花橘乎波奈其米爾多麻爾曾安  
我奴久麻多婆苦流之美十一丁九如此耳戀者可死足乳  
根之母毛告都不止通為又三丁妹之名毛吾名毛立者惜社  
布仕能高嶺之燒乍渡十一丁八言出云忌山川之當都心  
塞耐在十七丁四安佐疑理能美太流く許己呂許登爾伊

泥底伊波婆由遊思美刀奈美夜麻多牟氣能可未爾奴佐麻  
都里安我許比能麻久云十九丁廿九丁吾屋戸之茅子開爾  
家理秋風之將吹乎待者伊等遠弥可母などあり此用様  
ひ誤ることなれは引出つるなりは不見而往者云々ハ見ぞして  
往バ益て戀トからむとて云を煩そ吾來ト云むが如  
し足日本能云くハ石根が凝コしコさコ菅根を引ハ引難ら  
らむとて標のみを結と云むが如し石根許其思美ハ第一  
なとハ同格よて疑クスク為便乎無美ハ為便ハ無からむとて  
待者苦彌ハ待む苦しハらむとて戀者可死ハ戀ハ死ぬべ  
からむとて惜社ハ惜ハらむとてこそ言忌クハ言バ忌ク

新古今和歌集

しあらむとて伊等遠彌可母ハ甚遠ハらむとてと云意  
るり古來此用様の意を辨へハる人なくして一首の大槪  
を誤れること多しこの故今ハづらハしきをいととて  
して具ハ辨へハるなり此れハ益而戀ハ石見を益て戀  
云意としてハ一向ハまきハこゆハべハらハびハあハるハ古歌を註  
釋せし人くまなくとき究むることありハとむハてハ其意の  
おちめうハきハとハろハいハとハりハてハまハきハほハどハよハてハ  
さハいハおハきハさハるハものハおハちハまハげハくハべハきハことハならハをハやハ  
九ハ遊内乃多努之吉庭爾梅柳乎理加謝思底婆意毛比奈  
美可毛とあるハ思なハらむハと云むが如し自餘ハから  
むとてといふ意なるよこれ一首ハハからむといふ意  
よ用ひハり其ハ精なると粗なるとのいさハり異あるの

雅言成法下卷

みみて、もとより此も彼も用ひたる言あるべし。古今集も花きき穂も出て戀バ名を惜み下ゆふ紐の結ぼれつ、とあるも、名が惜からむとて、といふ意も用ひたるなり。これ古來註者等も心づらば、本居氏遠鏡も惜サナリ。釋しとるハとがへることなり。戀バと云ハ、未來のけて云詞なれば、惜サナリとハ譯をべららば、必を後撰集よりらむとて、ときらびてをまろきことなり。後撰集よ、去ぐれふり零なハ人見せもあへぞ散なバ惜みをれる秋をきとあるも、散なバ惜からむとてといふ意もて同よ。これ五ちり。

○八卷廿九 夏野乃繁見丹開有姫由理乃云、十七廿七 波流乃野能之氣美登妣久、鷺音太爾伎加受云、十九

廿五 暮左禮婆藤之繁美丹云、なとあるハ、繁美を體言ひとるをこれハ體言よをゑて云るごとく、美ハ麻美牟米よよをゑて云るよて。前ヨ云るごとく、美ハ麻美牟米よひとるをこれハ體言よをゑて云るごとく、美ハ麻美牟米よ第二位よいひをゑて體言よせること常格なり有ハ良利流礼ハ活用イハ言るを第二位よい此ハ俗ハ繁んであるひをゑて、阿里乃盡ると云よ全同也。此ハ俗ハ繁んである間よとやりよいをむが如し。後撰集も夏草の繁みよ生る九子管まるが丸宿よいくよ經ぬらむとあるも同也。後鳥羽院御集も雨をやむ雲のうをみを行月の影れをるなる夏の夜の空源氏葵卷よあさみよや人のたりとつ？の方ハ身もをほつまで深きこひこれ六つなり。

○十一三十 泊瀬川速見早湍乎結上而不飽八妹登問師公羽裳とあるハ、俗ハ速い早湍をと云むが如し。この例餘

見えとる所あり。尤めづらくき用ひ様あり。金槐集。君  
 の代。猶長らへて月清み秋の御空の影を待らむとある  
 月清きとあるべきを。みと。もよまれ。ハ。今の歌の美  
 の用ひ様よられ。ふや。これ七。あり。  
 ○三卷六十。雄自毛能負見抱見云。十一。廿五。波禰縵  
 今為妹之浦若見咲見愠見着四紐解。又。廿六。梓弓引見弛見  
 不來者不來者其其奈何不來者來者其乎。十二。十六。梓  
 弓引見縱見云。十六。廿一。三名之綿蚊黑為髮尾信櫛持於  
 是蚊寸垂取束舉而裳纏見云。十八。廿六。波之吉余之曾  
 能都未能古等安沙余比爾惠美美惠末須毛云。又。廿八。乎

登女良爾都刀爾母夜里美之路多倍能蘇泥爾毛古伎禮香  
 具播之美於積豆可良之美云。なるどあるハ。負も。抱も。  
 咲も。愠も。といふ意なるよ。いづれも准へて意得べし。  
 買て見抱て見咲て見愠て見の意はあらば。きてこの美  
 の言ハ。又。一の格よて。前件よ。いへる美とも。ハ。きよく異  
 似り。よ。さて右よ引る如く。多くハ。美の言を雙べて。引美弛  
 美とやうよ。いへるを。又。於是蚊寸垂云。舉而裳纏見とや  
 うよ。雙べぞして。も云。又。咲み咲ぞもとやうよ。云ることも  
 あれど。みれ同意あり。新撰万葉。不飽之手君緒戀鶴涙許  
 曾浮杵見沈箕手有豆都禮とあるも。同ト。後撰集。十月零  
 ちき。ちぐれを冬の初るりける。千載集。満塩の末葉をあ  
 らみ流芦の君をを思ふ浮み沈み。後拾遺集。難波瀉浦

吹風浪立バつものぐむ芦の見えみ見えみ伊勢集よと  
しるうをあひみあははみるげきむ人のうへこそ吾身  
るりけれ又長歌よるなれつゝ吾身ハ泡と浮びつゝ消み  
消ぞみ云々六帖よ逢事ハなましの池の水なれや絶み絶  
ぞみ年の經ぬらん住吉物語よ泣み咲ひみあり暮これ  
すれど文辞よも見えてこれハ後にも多き詞あり

ハなり。等と云辭よくはぐの異ある事

○二卷 御立之島乎母家跡住鳥毛荒備勿行年替左  
右十四 信濃奈流知具麻能河泊能左射禮思母伎彌  
之布美氏婆多麻等比呂波牟などあるハ家として住玉と  
化て拾むの意なり古今集よ今日來ずハ明日ハ雪とそ  
降なましとあるも雪とるりてぞの意よて同じ。一卷

よ。栲乃穗爾夜之霜落磐床等川之水凝云々とあるハ磐床  
と化ての意なり古事記中卷神武天皇條よ宇泥備夜麻比  
流波久毛登韋由布佐禮婆加是布加牟登曾許能波佐夜牙  
流とあるも晝ハ雲と化て居の意なり例多し。

○一卷 熱田津爾船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今  
者許藝豆菜又 神佐備世須登云々高殿乎高知座而云  
云山神乃奉御調等春部者花挿頭持云々大御食爾仕奉等  
上瀨爾鵜川乎立云々などあるハ船乗為むとて又神さび  
為給小とて奉る御調とて大御食よ仕奉るとての意なり  
をべて古言よを登豆と云ることなし。今京よりこれよ  
さいと多き言あり



や、古くハ、延喜式鎮火祭祝詞よ、あふ、一、あ、等とのみ云よ、  
るのみ、それを除て他よ見えたることなし、  
等豆の意を具とればなり、

○一卷十二、高山與耳梨山與相之時立見爾來之伊奈美  
國波良とあるハ、高山と耳梨山と與よの意なり、同卷  
二、弟日娘與見禮常不飽香聞とあるハ、弟日娘と與よの意

なり、此類いと多けきごと、ハ意をき、とふるむる、  
ことあらねば例を引までもなり、

○五卷五、大王能等保乃朝廷等斯良農比筑紫國爾云々  
とあるハ、遠の朝廷とあるの意なり、十八、高御座安

麻能日繼登須賣呂伎能可未能美許登能伎己之乎須云々

とあるハ、天の日繼とありての意なり、ハ、  
○十四十四、志母都氣努安素乃河泊良欲伊之布麻受蘇

良由登伎奴與奈我已許呂能禮又三、可奈刀田乎安良我  
伎麻由美比賀刀禮婆阿米乎万刀能須伎美乎等麻刀母廿

卷三十一、由古作枳爾奈美奈等惠良比志流敝爾波古乎等  
都麻乎等於枳豆等母枳奴又二、阿良之乎乃伊乎佐太波

佐美牟可比多知可奈流麻之都美伊埜豆登阿我久流、これ  
らの等ハ曾の辭よ通々、ま、曾の辭よ似てかるきハあ

り、ま、べてかやうよ用へること、東歌よのみ見えたり、さて  
十四十二、伊香保呂爾云々比等登於多波布云々とある

十四十二、伊香保呂爾云々比等登於多波布云々とある

歌をその下相聞の中より再出せらるるハ、比等曾於多波布とあり。これハ正しく曾と通せしとるなり。

○三卷 四十丁、逆言之狂言等可聞高山之石穗乃上爾君之卧有とあるハ、續紀宣命、天皇詔旨止勅大命と多くある止、同トク、爾互といふ意あり、されバ狂言よて高山の云云、君が卧せる歟と謂らるべし。同卷 五十丁、逆言之狂言登加聞白細爾舍人装束而云、十七丁、多婆許登等可毛るとあるみれ同ト。又これらの言等ハ、と言とのみいふ、同トと云説もあり。十九丁、玉梓之道爾出立往吾者公之事跡乎負而之將去とあるハ、事ハ借字よして、言を

言跡といへるともきこえぬ。○十六丁、左耳通良布君之三言等玉梓乃使毛不來者云とあるハ、君が御言をもちての謂ときこえたり。

○十九丁、住吉爾伊都久祝之神言等行得毛來等毛船波早家無とあるハ、神言よ因て、と云ほどの意ときこえぬ。

○二卷 四十丁、鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待作將有四卷 二十丁、為便乎不知跡立而凡衝これら不知よと云意あり。凡不知といふ言の下よある等ハ、みれ助辭よて語勢を助けとるのみよて、意ハ關からねバ捨て聞べし。

古事記崇神天皇條歌よ伊由岐多賀比宇迦迦波久斯良尔  
 登美麻紀伊理毘古波夜とあるを書紀と載とるよハ登字  
 なしこれ有も無も大のと同トきを知べし又卷こよ恐  
 美等難三等忌見等と美の辭の下よある等も皆助辭の  
 例よてことさらよ意なきされど語勢を助けともつ為よ  
 かくのごとくこの助辭をねらばしてハ協をぬ所多し  
 といとづらのみハ思ふべらば三卷丁六十よ  
 雖戀効矣無跡辭不問物爾波在跡とあると十三丁廿八よ雖  
 思印乎無見云々言不問木雖在とあると同趣なるよて等  
 の助辭よこと小意なきを知べし但し右の歌ハありても

くるしからぬ所なるを必なくてハ協をぬ所ありをべて  
 助辭よハことよカありて語勢を助くる料のものあるを  
 といとづらの辭とのみ思ひ言數の一句よ足ぬときは  
 はさみ補て五言七言よ足すのみ此具と意得て死物よハ  
 て用ふあらふ後人の歌詞の助辭よハカともくいていふ  
 ろひなくきこゆること多し古人の助辭ハみふ活々とい  
 て動きさるが故よいみしくカありて語の勢を助けたり  
 も一言數を足すのみ此具とせば古人の歌詞よ五言の位  
 を三言四言よみ七言の位を五言六言等よよめること  
 其理なきことなるをやなほくそくハ余が歌詞三格例

の末は附て云るを味見て知べし。

毛といふ辭よくさぐりの異ある事

○一卷下。焚田津爾船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝豆菜とある毛ハもまとの毛なり。月の出るを待てをるよ。月のみあらば潮もまさみち來て御船出せむよ時うれひぬるとの意なり。例多し。

○一卷下。君之齒母吾代毛所知磐代乃岡之草根乎去來結手名とある毛ハをもの毛よて物二を兼て云詞なり。君よとひをも。吾よとひをも。兼は知むの意なり。これも例多し。

○一卷下。數ハ毛見放武ハ万雄情無雲乃隱障倍之也

とあるハ數とでも或ハ數なるりととも云意なり。心だらひるることハあるをむとせめて數とでも或ハ數はれりともとの意なり。これも例多し。

○一卷下。百磯城之大宮處見者悲毛。かくさま不用ひとる毛ハ皆歎息の聲よてさても悲しき事よてある哉との意なり。許多ある辭なり。皆同し。

○二卷下。玉葛花耳開而不成有者誰戀爾有目吾孤悲念乎。こハタガコヒナラモと訓て誰が戀は有むと云意なり。目ハ牟よ通ハ云とるあり。これもをりくあり。

從と云辭を用へる様は異ある事  
 從を用理とも由理とも用とも由ともいへること古言は  
 多し其中用理と云るハ古事記書紀萬葉等ハ甚多しさて  
 一言よいひて宜しき所を古事記ハ用とのみ云て由と  
 いへることなり書紀ハ由とのみ云て用といへること  
 なるハ万葉ハ用と云る處も由と云る處もありてさごま  
 りぬし由理と云ることハ集中にてハ廿卷廿五ハ阿須由  
 利也とあると同卷廿六ハ奈爾波能津與利とあるを元曆  
 本ハ由利とある其を除て他ハ亦ハ續紀宣命ハ由利と  
 云ること多し古今集よりこの方ハ用理とのみ云て餘の  
 三くさふいへること絶とり便なき事なり

さて右の四くさ用理いつれハ云ても同本をとなる  
 をその用へる様小よりてくさくふきこゆることあれば  
 よく味見てその用様の差別を知べケチメ  
 ◎二卷十九ハ石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都  
 良武香とあるハ木間あらこの意にてこハ尋常の用様ヨソツチ  
 て異なることありこの從を由といへる所も用と云る所  
 もあり皆同ト  
 ◎二卷十四ハ古爾戀流鳥鴨弓絃葉乃三井能上從鳴渡遊  
 久とあるハ御井の上を鳴渡はゆくと云意なりかやうハ  
 をよ通ハして用へること多しこの從をも由と

いへる所も用といへる所もあり皆同トさてかくさまふ用ひとること集中の外古事記書紀其他の古書又古今集并物語書等も多し

○四卷<sup>三十一</sup>ハ<sup>八</sup>丁<sup>二</sup>。從<sup>ア</sup>蘆<sup>シ</sup>邊<sup>ヘ</sup>滿<sup>ミ</sup>來<sup>ク</sup>塩<sup>シ</sup>乃<sup>ハ</sup>云<sup>ク</sup>とあるハ蘆<sup>ア</sup>邊<sup>シ</sup>と云<sup>フ</sup>意<sup>ハ</sup>も蘆<sup>ア</sup>邊<sup>シ</sup>へと云<sup>フ</sup>意<sup>ハ</sup>もきこゆるなりかやうに用<sup>ツ</sup>へる

こともいと多しさてこの從<sup>ヨ</sup>をも由<sup>ユ</sup>といへる所も用<sup>ヨ</sup>と云<sup>フ</sup>る所もあり皆同ト高山<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>羽<sup>ノ</sup>針<sup>ノ</sup>舟<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>秘<sup>ノ</sup>良<sup>ノ</sup>橋<sup>ノ</sup>

○十三<sup>廿五</sup>丁<sup>二</sup>。人<sup>ヒ</sup>都<sup>ト</sup>末<sup>マ</sup>乃<sup>ハ</sup>馬<sup>ウ</sup>從<sup>ヨ</sup>行<sup>リ</sup>爾<sup>ニ</sup>已<sup>ハ</sup>夫<sup>ノ</sup>之<sup>ガ</sup>步<sup>カ</sup>從<sup>ヨ</sup>行<sup>リ</sup>者<sup>バ</sup>云<sup>ク</sup>とあるハ馬<sup>ウ</sup>よて行<sup>バ</sup>步<sup>ヨ</sup>て行<sup>バ</sup>といふ意なりこの從<sup>ヨ</sup>をも

由<sup>ユ</sup>と云<sup>フ</sup>ても用<sup>ヨ</sup>と云<sup>フ</sup>ても同トことなりかさまふ用<sup>ツ</sup>へる

こと古事記書紀にも多し其他にも例あり但しこれハ馬

よて行<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ことを馬<sup>ウ</sup>從<sup>ヨ</sup>行<sup>リ</sup>步<sup>ヨ</sup>て行<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ことを步<sup>カ</sup>從<sup>ヨ</sup>行<sup>リ</sup>舟<sup>フネ</sup>

よて行<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ことを舟<sup>フネ</sup>從<sup>ヨ</sup>行<sup>リ</sup>と云<sup>フ</sup>事ハこれあれありてひ

ろく其他の物<sup>ハ</sup>かやうに云<sup>フ</sup>る<sup>ハ</sup>記<sup>シ</sup>を<sup>キ</sup>見<sup>ル</sup>あ<sup>ら</sup>ば只<sup>シ</sup>古事記中卷景行天皇條<sup>ニ</sup>足<sup>リ</sup>よて行<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ことを蘇<sup>ソ</sup>良<sup>ラ</sup>波<sup>ハ</sup>由<sup>ユ</sup>

賀<sup>カ</sup>受<sup>ズ</sup>阿<sup>ア</sup>斯<sup>シ</sup>用<sup>ヨ</sup>由<sup>ユ</sup>久<sup>ク</sup>那<sup>ナ</sup>とあるのみなりひろく何<sup>レ</sup>もまれ云<sup>フ</sup>ま

トき詞<sup>ハ</sup>ハあらざめれど自ら然<sup>ル</sup>云<sup>フ</sup>べき物の形<sup>ハ</sup>き故<sup>レ</sup>なるべし

○五卷<sup>二十</sup>九<sup>丁</sup>。和<sup>ワ</sup>禮<sup>レ</sup>欲<sup>ヨ</sup>利<sup>リ</sup>母<sup>モ</sup>貧<sup>シ</sup>人<sup>ヒト</sup>乃<sup>ハ</sup>父<sup>チ</sup>母<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>飢<sup>ウ</sup>寒<sup>サム</sup>良<sup>ラム</sup>牟<sup>ム</sup>又<sup>ハ</sup>十九<sup>丁</sup>

久<sup>ク</sup>須<sup>ス</sup>利<sup>リ</sup>波<sup>ハ</sup>牟<sup>ム</sup>用<sup>ヨ</sup>波<sup>ハ</sup>云<sup>ク</sup>十四<sup>十一</sup>丁<sup>二</sup>。與<sup>ヨ</sup>曾<sup>ソ</sup>爾<sup>ニ</sup>見<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>欲<sup>ヨ</sup>波<sup>ハ</sup>云<sup>ク</sup>な

とあるハ、吾小まさりて、薬服小まさりて、外見一まさ  
りてと云意なり

今といふ詞の用様小よりて異ある事

○一卷 丁 二、釵着手節乃崎ニ今毛可母大宮人之王藻菊良  
武とある今ハ、即今の今にて、かやうは用とるを尋常のこ  
とにて、云までもなる。○十二 丁 二、湊入之葦別小船障多今來吾舟不通跡念莫  
十三 丁 二、門居郎子内爾雖至痛之戀者今還金などある  
ハ、俗は追付と云むが如し、古今集離別は、立ちあれぬが  
の山の嶺はねふる松と云むが如し、今かへりてむ。土左日記

○今日破子持せて來さる人名などを、今思出む。源氏物  
語寄生は、よろづハ今さむらひてなむなどあるも同し。  
○十七 丁 二、伊毛我伊弊爾伊久理能母里乃藤花伊麻許  
牟春毛都彌加久之見牟とあるハ、俗は又と云は通ひて聞  
ゆ。俗言は今度と云ハ、この今より出さる言はや。古今集秋  
上は、けふよりハ今とむ年の昨日をそいつりあとのを待  
つとるべき。土左日記は、一歌は事の飽ねハ今とある。こ  
れも又と通ひてきこゆ。集中十卷 丁 廿九、月累吾思妹會夜  
者今之七夕續巨勢奴鴨とある今も、又と云は通ひてきこ  
ゆるや。

○四卷 五丁 今所知久邇乃京妹二不相久成行而早見奈  
 六卷 四丁 今造久邇乃王都者山河之清見者宇陪所知良  
 之八卷 三丁 今造久邇能京爾秋乃夜乃長爾獨宿之苦左  
 七卷 二丁 今造班衣面就吾者所念未服友十二丁 新治  
 今作路清聞鴨妹於事矣書紀神代卷一汝應住天日隅宮者  
 今當供造又集中十四丁 一丁 信濃道者伊麻能波里美知可  
 里婆彌爾安思布麻之牟奈久都波氣和我世廿卷十九丁 今  
 替爾比佐伎母利我布奈豆須流宇奈波良乃宇倍爾奈美那  
 佐伎曾彌七卷八丁 波彌護今為妹乎浦若三去來率河之音  
 之清左十一丁 見世五丁 されらの今新と云と回中 新來新參

ま之新熊野新日吉新八幡るどいふをも思合すべし土左  
 日記よ邊よ松もありき五年六年の内よ千年や過はけむ  
 片枝ハなくなりけり今生とるそ雜れるとある今も同  
 ○五卷 三丁 今世能人母許等期等目前爾見在知在云々  
 とある今ハ此と云と回中集中今代今生今夜などかけ  
 るも今と此と通ふ故なるべし佛足石碑歌よ久須理師  
 波都祢乃母阿禮等麻良比止乃伊麻乃久須理師多布止可  
 理家利米太志可利雜利とある伊麻も同ト  
 ○一卷 十丁 就田津爾船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今



者許藝<sup>ハコギ</sup>互菜<sup>テナ</sup>四卷<sup>セニ</sup>。常<sup>ツチヤマズ</sup>不止<sup>カヨヒシ</sup>通之<sup>キミガ</sup>君我使不來<sup>ツカヒコズ</sup>今者不相<sup>イマハ</sup>跡<sup>トク</sup>絶<sup>ヒ</sup>多比<sup>マ</sup>奴<sup>ラ</sup>良<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。などある今者<sup>イマハ</sup>ハ俗<sup>マ</sup>よまうハといふよあ  
とれり。

之<sup>シ</sup>奴<sup>マ</sup>布<sup>フ</sup>といふ詞の用ひ様よよりいさゝか異<sup>カ</sup>ある事。  
○一卷<sup>ハ</sup>。山<sup>ヤマ</sup>越<sup>コシ</sup>乃<sup>ノ</sup>風<sup>カゼ</sup>乎<sup>ヲ</sup>時<sup>トキ</sup>自<sup>ジ</sup>見<sup>ミ</sup>寐<sup>マル</sup>夜<sup>ヨ</sup>不落<sup>オチズ</sup>家<sup>イハ</sup>在<sup>ナル</sup>妹<sup>イモ</sup>乎<sup>ヲ</sup>懸<sup>カケ</sup>而<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>竹<sup>タケ</sup>櫃<sup>ヒツ</sup>とあるハ家<sup>イハ</sup>よ留<sup>ル</sup>てある妻<sup>イメ</sup>を心<sup>ココロ</sup>よ懸<sup>カケ</sup>て戀<sup>コイ</sup>慕<sup>ヒ</sup>ひつると  
ちり。此例甚多し。

○十一<sup>ト</sup>。秋<sup>アキ</sup>柏<sup>カシバ</sup>潤<sup>ヌル</sup>和<sup>ハ</sup>川<sup>カハ</sup>邊<sup>ヘ</sup>細<sup>ヌ</sup>竹<sup>タケ</sup>目<sup>メ</sup>人<sup>ヒト</sup>不<sup>シ</sup>顔<sup>メ</sup>面<sup>ヘ</sup>公<sup>キミ</sup>無<sup>ク</sup>勝<sup>ク</sup>とあ  
るハ人<sup>ヒト</sup>目<sup>メ</sup>を志<sup>シ</sup>のびかくるればあふこととのあらぬ故<sup>ユ</sup>ハ公<sup>キミ</sup>  
を戀<sup>コイ</sup>しく思<sup>オモ</sup>ふ心<sup>ココロ</sup>のさへおれぬとの意<sup>イ</sup>あり。志<sup>シ</sup>めびかくる

る謂<sup>ヨミ</sup>もて不<sup>シ</sup>顔<sup>メ</sup>面<sup>ヘ</sup>の字<sup>ジ</sup>をかけり。かやうよ云<sup>イハ</sup>ることと多<sup>シ</sup>例<sup>リ</sup>多<sup>シ</sup>

○十二<sup>ト</sup>。梓<sup>アツサ</sup>弓<sup>ユミ</sup>引<sup>ヒキ</sup>而<sup>テ</sup>不<sup>シ</sup>縱<sup>ユル</sup>大<sup>オホ</sup>夫<sup>サマ</sup>哉<sup>ヤ</sup>戀<sup>コイ</sup>云<sup>イハ</sup>物<sup>モノ</sup>乎<sup>ヲ</sup>忍<sup>シ</sup>不<sup>シ</sup>得<sup>ズ</sup>牟<sup>ム</sup>と  
あるハ得<sup>ユ</sup>とへことへられむやハことへられずと云<sup>イハ</sup>意<sup>イ</sup>な

忍<sup>シ</sup>とへことあることを忍<sup>シ</sup>といふことハ古<sup>コ</sup>の常<sup>トコ</sup>あり。

○一卷<sup>ト</sup>。黄<sup>オウ</sup>葉<sup>エフ</sup>乎<sup>ヲ</sup>婆<sup>バ</sup>取<sup>トリ</sup>而<sup>テ</sup>曾<sup>ソ</sup>思<sup>シ</sup>奴<sup>ヌ</sup>布<sup>フ</sup>云<sup>イハ</sup>くとあるハ俗<sup>ソク</sup>よ  
執<sup>ツク</sup>て賞<sup>シヤウ</sup>翫<sup>クワン</sup>するといふ意<sup>イ</sup>あり。かやうよ用<sup>ユウ</sup>とること十七<sup>ト</sup>十

八<sup>ハチ</sup>十九<sup>ジュウ</sup>二十<sup>ニジュウ</sup>の卷<sup>クワン</sup>にことよ多<sup>シ</sup>。

等<sup>ト</sup>母<sup>モ</sup>之<sup>シ</sup>伎<sup>キ</sup>といふ詞の用<sup>ユウ</sup>様<sup>サマ</sup>によりていさゝか異<sup>カ</sup>ある  
事<sup>コト</sup>

○一、卷<sup>二十</sup>。藤原<sup>フチハラノ</sup>之大宮<sup>オホミヤツ</sup>都加倍<sup>カヘアレツク</sup>安禮<sup>ヤ</sup>衝哉<sup>ヲトメ</sup>處女<sup>ガトモ</sup>之友<sup>ハトモシ</sup>者<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>吉呂<sup>キロ</sup>賀聞<sup>カモ</sup>とあるハ、藤原<sup>フチハラノ</sup>の大宮<sup>オホミヤツ</sup>殿<sup>ノ</sup>新造<sup>ニウゾウ</sup>奉<sup>ホウ</sup>て、さていつき仕奉<sup>シホウ</sup>る官女<sup>クワンニョ</sup>のともがらの、さてもうらやま<sup>イキ</sup>こと哉とあり。かくうらやま<sup>イキ</sup>ことを、等母<sup>トモ</sup>之<sup>シ</sup>伎<sup>キ</sup>と云ること例多し。

○九、卷<sup>十五</sup>。欲<sup>ミタク</sup>見<sup>ミ</sup>來<sup>キ</sup>之<sup>シ</sup>久毛<sup>クモ</sup>知<sup>シル</sup>久<sup>ク</sup>吉野<sup>ヨシノ</sup>川<sup>カハ</sup>音清<sup>インセイ</sup>左見<sup>サミ</sup>二友<sup>ニトモ</sup>敷<sup>シ</sup>とあるハ、見<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>マ賞<sup>メヅ</sup>ら<sup>ル</sup>しく<sup>シ</sup>怜<sup>オモシロ</sup>きと云意<sup>イ</sup>なり。かくさまにいはることも例多し。

○四、卷<sup>二十</sup>。難波<sup>ナニハ</sup>方塩<sup>カタシホ</sup>干<sup>ヒ</sup>乃<sup>ノ</sup>名凝<sup>ナゴリ</sup>飽<sup>アクマ</sup>左右<sup>テニヒト</sup>二人<sup>ニヒト</sup>之<sup>シ</sup>見<sup>ミ</sup>兒<sup>コ</sup>乎<sup>ヲ</sup>吾<sup>アレ</sup>四<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>毛<sup>モ</sup>とあるハ、吾<sup>アレ</sup>ハ見<sup>ミ</sup>ることの、さても少<sup>オホ</sup>き事<sup>コト</sup>哉<sup>ナリ</sup>。又ハ吾

ハ見<sup>ミ</sup>ることの、さてもまれなること哉との意<sup>イ</sup>なり。これハ後世<sup>ノチノヨ</sup>ハ、常にいふ等母<sup>トモ</sup>之<sup>シ</sup>伎<sup>キ</sup>ハ異<sup>ヒ</sup>れることなり。第一<sup>ノ</sup>立<sup>タ</sup>たはる<sup>ル</sup>那<sup>ナ</sup>と云辭<sup>コトバ</sup>と牟<sup>ム</sup>といふ辭<sup>コトバ</sup>との差<sup>サ</sup>語<sup>コトバ</sup>の尾<sup>ビ</sup>はつけて、紐<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>設<sup>セ</sup>名<sup>ナ</sup>あるハ、爾<sup>ニ</sup>寶<sup>ホ</sup>比<sup>ヒ</sup>爾<sup>ニ</sup>往<sup>ユカ</sup>奈<sup>ナ</sup>など云那<sup>ナ</sup>の辭<sup>コトバ</sup>を、今<sup>イマ</sup>までの註<sup>チュウ</sup>者<sup>シャ</sup>等<sup>ト</sup>の牟<sup>ム</sup>と云<sup>イ</sup>べきを那<sup>ナ</sup>と云<sup>イ</sup>るハ、古語<sup>コゴ</sup>の一<sup>ヒト</sup>格<sup>カク</sup>なり。ととやをく云<sup>イ</sup>るハよりて、万葉<sup>マンヤク</sup>讀<sup>ヨミ</sup>者<sup>シャ</sup>の那<sup>ナ</sup>と牟<sup>ム</sup>と多<sup>オホ</sup>古言<sup>コゴ</sup>ハ通<sup>トウ</sup>を<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>へるのみを、と意<sup>イ</sup>得<sup>トク</sup>とめれど、古言<sup>コゴ</sup>に那<sup>ナ</sup>と牟<sup>ム</sup>と、その用<sup>ヨウ</sup>へるさま、よく味<sup>アジ</sup>見<sup>ミ</sup>れば、きをや<sup>シ</sup>ら<sup>ル</sup>ハ別<sup>ワケ</sup>て、きこゆることとるれば、大<sup>オホ</sup>うさ<sup>シ</sup>見<sup>ミ</sup>をぐ<sup>シ</sup>てハ、誤<sup>アヤマ</sup>つことありと知<sup>チ</sup>べし。志<sup>シ</sup>あるを古今集<sup>コキンシュ</sup>の頃<sup>ノ</sup>よりこなり。那<sup>ナ</sup>とい

ふべきをもるべて年とのみ云て。那と云言の用ひ様失ぬ  
 るハ。くちをききこちをや。後世忘れどな。又かそらド  
 又下きはをさるし。其な。とくへバ。設那往那なと云ハ。一向  
 小設む。一向は往むと急ぎ進みて。餘念なきことおひひ。設  
 年往年など云ハ。尋常は將設將往といへるのみよて。  
 志の急ぎ進める意ハさらよ。これにて古言は急と緩  
 知べく。又古人の言語を精嚴とせしこと。さて今古書はむ  
 よも大らと見す。古人の詞の味を記きまへが  
 ときことを。そもこの那ハ。名告沙根あるハ。草乎刈核な  
 も思ふべし。都云祢も同行の言よて。皆那行自のうへよ。第一位よて  
 那と云。他は令するときよハ。第四位よて祢といへるなり。

まて第四位よ。されバ往那と往祢とハ。自他の差異あ  
 ふハ。令する言なり。い。されバ往那と往祢とハ。自他の差異あ  
 るのみよて。一をぢよ念入とる意ハ云なり。往那と云ハ。俗  
 と云意。往祢ハ何分よ。往ハ。い。でその奈と年との異をるは  
 と云意なるよて。知べし。い。でその奈と年との異をるは  
 十九。十九。霍公鳥雖聞不足。網取爾獲而奈都氣奈可  
 礼受鳴金とある歌の第四句を。かりよ獲而奈都氣年と換  
 て。誦へる。ろ見よ。語勢なごらみてふさる。らら。一念  
 獲てなつけむ。と急ぎ進める意の歌なればなり。又同卷  
 十七。霍公鳥來鳴響者草等良年花橘乎屋戸爾波不殖而  
 といふ歌の第三句を。か。草等良那。換て誦へる。ろ  
 みよ。語勢せまりてさら。小叶を。一念よ急ぎ進める意の

處ならねばなり。まゝて往那時來那時などハさらハ云べ  
からじ。これにて通そし云る言るらぬを知べし。

我爾と我禰との差

古言よいへる我爾と我禰とハ言の似とるのみよこそあ  
まよく味見れば用へる様きをやゝに異れることなり。そ  
の異れるゆゑハ我爾ハ之似我禰ハ之根にてその詞のよ  
すくるところもとより別るればなり。志あるを本居氏の  
我禰ハ豫の意我爾ハ豫の意なるを禰をつづめて我  
爾といひとるなりと説て其趣詞の玉緒も著せしるよ  
よりて世の古學者その説も委て強て心を費さむものと

もせざめれど其小いまさ考のいとらざることなり。其故  
ハ古今集の頃より我爾と我禰とを一ふまぎらそし我禰  
の辭ハ失て必我禰と云べきところをも我爾との云る  
をいみいき變異あり。志あるよ古今集よりこのかとの歌  
よ古をあやまり。不ぎらそして云る趣をのりとして解と  
るがゆゑよ。今京よりの歌をこととるよえ。さてきこゆる  
ことなるを奈良朝よりあるよの引あてし考るよハむ  
げよあさらぬことのみちれば其證どもを左よ擧てこと  
つらむといへ。

○四卷一丁下。吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨。

又三十道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹八卷  
三十丁於布流橋玉爾貫五月乎近美安要奴我爾花咲爾家  
里云又九十丁秋田刈借廬毛未壞者雁鳴寒霜毛置奴我爾  
十卷音之干蟹來喧響目又五十丁秋就者水草花乃阿要  
奴蟹思跡不知直爾不相在者十三丁海處女等纓有領巾  
文光蟹手二卷流玉毛湯良羅爾云十四丁武路我夜  
乃都留能都追美乃那利奴賀爾古呂波伊敞杼母伊末太年  
那久爾十一丁余が古義し説り又十卷五丁今朝去而  
明者來年等云子鹿丹且妻山丹るどあるを考ふべし消  
霞霏霞とある鹿丹ハ誤字と見ゆ  
香子ハ消ぬと云ふ似るむありの謂置奴我爾ハ置ぬと

云ふ似るむありの謂音之干蟹ハ音のかるると云ふ似  
る許の謂よておつるところハ消なむむありの置るむ  
むありのかるむありの意とるれり自餘ハなる此定  
よ心得てよくきこゆることなり  
とるおもわゆるのハ消ぬべき豫ての設よ念ほゆると  
云謂音のかるむありハ声のかるべき豫ての設よなく謂と  
らぬことなるをや  
○三卷三丁大夫之弓上振起射都流矢乎後見人者語繼  
金四卷二十丁佐保河乃涯之官能小歷木莫刈烏在乍毛張  
之來者立隱金五卷十三丁余呂豆余爾伊比都具可祢等云  
云十卷十四丁梅花吾者不令落青丹吉平城在人來管見之

根又サ橘之林乎ヲ殖ホト霍公鳥常ニ爾冬及住度金又四十朝露爾  
涑始秋山爾鐘禮莫零在渡金又七十足曳之山田佃子不秀  
友繩谷延與守登知金又八十秋都葉爾之寶敝流衣吾者不  
服於君奉者夜毛着金又六十雪寒三咲者不開梅花縱比來  
者然而毛有金十二丁里人毛謂告我祢縱咲也思戀而毛  
將死誰名將有哉十七丁伊末太見奴比等爾母都氣牟  
於登能未毛名能未母伎吉底登母之夫流我祢十八丁  
白玉乎都く美底夜良波安夜女具佐波奈多知婆奈爾安倍  
母奴久我祢夜良波ハ夜良十九丁十五丁大夫者名乎之立倍  
之後代爾聞繼人毛可多里都具我祢どあり古事記仁德

天皇條女鳥王歌多迦由久夜波夜夫佐和氣能美淤湏比  
賀泥書紀顯宗天皇卷美飲喫哉此云于魔羅你鳥野羅甫  
屢柯倭也也字なき本もありといへりあるとあるもみな  
同これら語繼金ハ語之繼之根の謂立隱金ハ立隱る之  
根の謂よて落るところハ語り繼が為立隱るハ為の意  
となまり自餘ハ皆此は准へてよくきこえたりそむく我  
祢ハ右は引る十卷の歌之根と書する字義よて云くせ  
む其の根本と云謂より起れる言よて其の為といふ意は  
落ることあり中昔の詞は后がね坊がね博士がね  
ると云る我祢も同く后がねハ后はなるべき其の根さ



及諸宣命祝詞等。天皇命とも書令義解。至風俗所稱別  
不依文字假令如皇御孫命及須明樂美御德之類也。見え  
てをめらみこと。申に御稱。ハまぎれもなきことなる  
。集中歌詞。をめろきと申にを。天皇とも。又皇御祖とも。  
皇祖とも。皇神祖とも。皇祖神とも書て。假字書。ハいづれ  
も共。須賣呂伎と見え。又それつらねたる趣。ハ正しく  
御祖の天皇のことを申せること。又當代天皇のことを  
申せる如く。きこゆる處もありて。まぎらなきがごとし。  
さるハ。をめろきのとて。神之御代。自とも。御靈多須氣。互と  
も。可見能大御世爾とも。等保伎美與爾毛とも。つかけたる

類ハ御祖の天皇等の事を申せる。疑なきを。乎須久爾奈  
禮婆。まゝ之伎麻須久爾能。なむつかけたるハ。大王之敷座  
國とある。ハいひさる異ならむ。て。當代天皇を申せる。ハ  
まぎらなきけさど。よく考れば。をめろきのとある方ハ。御  
祖より御代々々の天皇の食敷す。よ。ハいひ。當代天皇の  
御うへのみ申して事足るところハ。大王之敷座國とやう  
ハいへる。よ。自詞の趣の同トきにこそあれ。實ハをめろ  
きと申せると。大王と申せると。ハ別れ。さることなり。又を  
めろきのとて。大王之とて。遠乃朝廷とつかけたる。こ  
とあれハ。をめろきも。ねなきみも。同トさまみきこゆれむ。



まぎるゝことなれど、これもをめろきのとあるハ、御祖の  
 天皇等の御代々々の遠朝廷と申はこと、大王之とあるハ、  
 當代天皇の御うへのみ申して、事足る處はいへるのみよ  
 て、よく日おれさることなり、さておほきみと申をハ、天皇  
 をさらよ申さば、ひろく王列のかぎりをさして申せる  
 ことよて、字ハ、皇、王、大皇、大王、大君など書ることなるに、  
 その天皇の御うへを申せるおほきみハ、書紀孝徳天皇卷  
 二、屬天皇我皇可收万民之運とあるごとく、當代のをのみ  
 申せることよて、御祖なるを申せることハ、一ツもあること  
 なる、かくて天皇とあるをも、おほきみと訓申すまどき理

ハさらよなけれども、おほきみと申よ、天皇と書ることな  
 きハ、天皇とかけるをバ、まどきをめろきとのみ訓ことな  
 れバ、それままぎれど、おほきみと申をよハ、字を  
 かへさるなるべし、この故ハ、御命恐あるハ、麻氣乃麻爾麻  
 爾あるハ、行幸乃隨意などあるよハ、いづれも大王之ある  
 ハ、王之あるハ、大皇之あるハ、於保枳美能とてつゞけ下し  
 たることなるよ、まれハ、天皇之とて、御命恐あるハ、行幸之  
 隨とつゞけさる處あるハ、うつなく、天字ハ、大の誤寫よて、  
 必をめろきのとハ、申をまどきことなり、これらの事ハ、よ  
 く例を見定めなむ、自疑ハはれつべきことなり、

夷ヒナといふ事

○夷ヒナのから字モシまよひて比那ヒナといふことを中昔よりこの方なべて世の人こゝろ得誤りとするがゆゑ今これを辨ワカむと云古事記下卷雄畧天皇條三重嫁歌マキハク麻岐牟久能比志呂乃美夜波云く毛モ陀流都紀賀延波阿米袁於幣理ヒシロノミヤハハモトノリツキガハハミヲオヘリ那加都延波阿豆麻袁於幣理志豆延波比那袁於幣理云くナカツエハアママヲオヘリシシヅエハヒナヲオヘリとあるよて比那ヒナと云ハ東國アヅマの外なること論をまごどもいとときをやらに別れできこゆることなるを夷字を比那ヒナと訓するより中昔の人誤りて皇都の地をさうりする諸國をバ東西ヒナかきらばなべて比那ヒナと云こと意得て古

のまことヒナの比那ヒナを志れる人今までさうりしことといともかさをらいつきさばなりけき故右の歌を本居氏も比那ヒナと云ハ東國アヅマもこもれるをかく別ワカハ東を云るハ只上枝中枝下枝と三ワケ分充エテて云む料のみなり凡て歌ハさしも事の理ワケをきまめて云物モノハあらば事實コトは違ヒはば理ワケは背ける事コトだハあらざれば依ヨ来るまマに廣く云て詞コトを文フミなハにそ常トなりけると古事記傳コトといへるハせむ方カタなく強付ツキたる説ワケよハて甚も苦クしげハかさをらいつきこゆることありハいに依ヨ来るまマに廣く云て詞コトを文フミなハさハざるりハとて比那ヒナの内ウチの東國アヅマならむかくきはやうハ東アヅマと比那ヒナと

を分ち云べきよしやいあるべきを比那ヒナと云ひ畿内  
近國をさありとる西方北方の國を云阿豆麻アヅマとい人皆意  
得ありとる如く東方の國をさして云ことよそありける  
さてこそかの三重妹歌もよく理分できこゆることな  
れこそい古事記書紀萬葉等の古書を熟味見ばある  
ことなるを數百年來あやまりて人の心よみ付とる舊ナラ  
慣ハシのきよくのぞくらばて古の事をあきらめがほみ  
られいとおもひゆるせる人だはるほその差別を今まで  
得辨へざりしとおほえとり且四卷十六丹比真人笠麻呂  
下筑紫國時作歌とて天佐我留夷乃國邊爾直向淡路乎過

粟島アハシマ乎背爾見管云とあるよて考れば淡路よりまで  
も比那ヒナといはば四國ありよりをいへりしこと  
をも知べし夷字のこと別考あれど緊要ならねばこと  
よ云はば左右の稱  
○古事記よ左右とあるを本居氏のことよヒダリミギ  
りと訓新刻の令義解よ左右大臣の右をミギリと點をつ  
けとるそのよるところをあらば和名抄の左右京職左右  
馬寮などの右をみる美岐とあるこれ古よて正しき稱と  
こそおもわゆれ但し伊勢が亭子院歌合日記よ上達部ハ

はしのひざりみぎりよ。皆日あれて侍らひ給ふとあれば、  
みぎりといひさるも。むげよ後のことよハあらば。志うれ  
ども。ひざりと云よ對へむおとめよ。彼頃の女房などの。わ  
ざといひさりしことよハ非る。うるはしくハ和名抄の  
如く。美岐といふべきことよ。そおももる。假字ハ。かりな  
るるを。かの殘雪をのこんのゆきと云如く。りをんと轉し  
て。かんたと云とる。それよ對耦むおとめ。真字をまんたと  
云とること。源氏物語よ見えさり。真字ハ。もとよりのまんた  
と云べき理ハさ々れども。かんねと云よ對へむおとめ。と  
ざと女詞よ志うれ入るるべし。されハ鬚がちなる男の。

それやあなる處よて。かの女詞よなるひていをむねふさ  
はしからぬことよ。や。からふみ毛詩などよて。南をみんな  
みとよめるも。強て東をひん可しといふよ對へむおとめ。  
えせ博士などのいひ出さることよ。や。後よ。抽をぬきん  
ぐてなど。んを添て云ことよ。あれども。まんを。みんな。みななど  
云とハ。ことか。それり。又。催馬樂よ。繁よ。生とるを。志ん。トよ  
生とる。我家を。わいへんと云る類も。あれども。それハ。うさふ  
時の節曲を。そのま。志るしとる。なれば。さらなり。故。古本  
よハ。之。が。又。和伊。戸など。書とるを。や。

文字餘といふ事

○本居氏字音假字用格云。歌よ五もト七もトの句を一も  
ト餘して。六もト八もトよむことある。是必中よあいう

おの音のある句は限れることなり。えの音の例なきは、  
ある理ありあらむ

考<sup>未</sup>古今集より金葉詞花集まで、此格もつづれとる  
歌ハ見えば自然のことなる故なり。万葉以往の歌もよく  
見れば此格なり。千載

新古今のころよりして、此格の乱れとる歌を、其例を二  
三をり見え、西行など殊は是を犯せる歌多し。

いとバ源信明朝臣ほりくと有あけの月の月影は紅葉吹  
おろは山おろしの風これハ卅四もトあれども聞<sup>キ</sup>惡<sup>ニク</sup>あら  
ぬハ餘れるもトされ右の格るればなり。又後の歌ながら  
二條院讚岐あはそらみの浪間をきりけてあづくあまの  
息もつぎあへば物をこそおもへ。これハ句ごとよ餘りて  
卅六もトあり。其中ハ第二句のハ喉音ながらあ行の格

ハ非る故ハ此句ハまことまき<sup>マ</sup>あ<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>ト其他の四もハ皆  
右の格る。故ハ多く餘りされども耳よ多<sup>タ</sup>ざるハ自然  
の妙なり。上トあるハまことよさることなり。因檢るハ方

葉以往の歌も文字あまりの句ハ多<sup>タ</sup>ハあ<sup>ア</sup>い<sup>イ</sup>う<sup>ウ</sup>た<sup>タ</sup>の音  
を以て<sup>ト</sup>ど<sup>ド</sup>の<sup>ノ</sup>へ<sup>ヘ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>へ<sup>ヘ</sup>バ<sup>バ</sup>一<sup>ヒ</sup>卷<sup>マキ</sup>ハ借<sup>カ</sup>り<sup>リ</sup>五<sup>イ</sup>百<sup>ハ</sup>磯<sup>シ</sup>所<sup>ソ</sup>念<sup>ネ</sup>と<sup>ト</sup>あ  
るハ一句ハ九もトあれども耳よと<sup>ト</sup>ざるハ如<sup>カ</sup>シ<sup>シ</sup>この類  
多<sup>タ</sup>トあられども此格もつづれとる歌ハよむま<sup>マ</sup>ト<sup>ト</sup>き<sup>キ</sup>と云  
よハ定<sup>サ</sup>ら<sup>ラ</sup>ざ<sup>ザ</sup>り<sup>リ</sup>トことハ見えて古事記履中天皇御歌ハ多<sup>タ</sup>  
遅<sup>チ</sup>比<sup>ヒ</sup>怒<sup>ニ</sup>迹<sup>ジ</sup>泥<sup>ニ</sup>牟<sup>ム</sup>登<sup>ト</sup>斯<sup>シ</sup>理<sup>リ</sup>勢<sup>セ</sup>婆<sup>バ</sup>多<sup>タ</sup>都<sup>ツ</sup>碁<sup>ゴ</sup>母<sup>モ</sup>幕<sup>モ</sup>母<sup>モ</sup>知<sup>チ</sup>氏<sup>シ</sup>許<sup>コ</sup>麻<sup>マ</sup>志<sup>シ</sup>母<sup>モ</sup>能<sup>ネ</sup>  
泥<sup>ニ</sup>牟<sup>ム</sup>登<sup>ト</sup>斯<sup>シ</sup>理<sup>リ</sup>勢<sup>セ</sup>婆<sup>バ</sup>これハ第四句ハもトあ<sup>ア</sup>集中四卷<sup>ニ</sup>三十<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>

劍太刀身爾取副常夢見津何如之怪曾毛君爾相為この第一  
ナニノノサガソモと訓て七もトとするハ誤なり。さガハ俗  
マありなり。あさりまへなど云意にて。前表の意ならねバ  
ハの句とすべし。これもおの音なり。九卷丁十。春山者  
 散過去鞞三和山者未含君待勝爾これハ第二句ハもトあ  
ナ下。七。足日本之山田守翁置蚊火之下粉枯耳余戀居  
ク父れと。あいうおの音なり。十二下。海若之奧爾生有繩  
 乘乃名者曾不告戀者雖死これハ第四句ハもトあ十六四  
丁。真珠者緒絶為爾伎登聞之故爾其緒復貫吾玉爾將為  
これハ第三句ハもトあ又丁。荒城田乃子師田乃稻并倉  
 爾舉藏而阿奈干稻これハ第六句ハもトあ志吾戀良久者これハ第三句ハもトあ

の音など見えさり。然れどもかくあいうおの音なき文字  
 餘の句ハ耳よ立て聞ゆる故よ。古今集のころより下なり。  
 ハ此格を定めてよまぎ下よ。や此ハ其ころよなりて。さ  
 ろろよよくはくなれるか故なるべし。志ろるを千載集  
 のころよ至りて。やう下此格を志れる人な下て。みどれ  
 已下なるべし。万葉長歌の中よも。あいうおの音なき文字  
 餘。これらきあれど。已下づらはしければ。よ引ず。余が永  
 言格を照見て考べし。  
 字ウと牟ムと混へる事  
 ○梅は万葉和名抄をべて字米の假字なるを。後世牟米と

書万葉も牟梅とかける所あるハ。後又寫し誤れるもの  
 あり。これハ字と牟と。字形の似たる故。誤れるものなり。  
 といへど。さよあらば。後世の人。字米とかきとるをも。ンメ  
 と。きこゆるやう。又唱るから。つひは假字をも書誤めとる  
 あり。○孫ハ。字麻古。よて。名義も審息子なりといふ説。さる  
 ことなるを。和名抄。無万古とある。これハ。字字を書ても。  
 ンマコ。ときこゆるやう。又唱ふるのら。つひは假字をも誤  
 れるなるべし。○馬ハ。書紀。万葉をべて。字麻の假字なるを。  
 後世牟麻と書。万葉も牟麻とかける所あるハ。廿卷廿七  
 丁。牟麻  
とあり。後又寫し誤りたるものなり。これも字と牟と字形の

近き故。誤れるハ。あらで。字麻とかきとるをも。後又  
 ン。ときこゆるやう。又唱るのら。つひは假字をも書誤めと  
 るるなり。かくて和名抄。馬和名無万。驛馬。今按此間云。波祢  
 無万。戴星馬。和名字比太。非能無麻。駁馬。俗云。布知無万。驢騾。  
 和名字佐岐無麻。ま。右馬寮。美岐乃牟万。乃豆加佐。左馬寮。  
 比多里乃牟万。乃豆加佐。主馬寮。美古乃美夜。乃牟万。乃豆加  
 佐。ま。厩牛馬舍也。和名牟万夜。ま。驛和名無末夜。ま。牧  
 尚書云。萊夷為牧。無万岐。ま。左傳注云。馬褐。馬被也。和名無  
 麻岐。沼。ま。馬蝟。和名無末世美。ま。上總國海上郡馬野。無  
 万。乃筑前國嘉麻郡馬見。牟万美。同下座郡馬田。無万田。ま。

源順の自注せるよはいづれも無麻と見えさてま駿馬  
漢語抄云土岐字万日本紀私記云須久礼太留字万駕馬漢  
語抄云於曾岐字万驄馬日本紀私記云美太良乎乃字万漢  
語抄云鉄驄馬久路美度利能字麻楊氏漢語抄云落星馬保  
之豆岐乃字万駮馬漢語抄云乎之路能字麻漢語抄云馬射  
和名字末由美本朝式云五月五日競馬和名久良閑字麻辨  
色立成云馬把字麻久波漢語抄云馬刷于麻波太氣楊氏抄  
云馬齒草字萬比由紫貝和名字万乃久保加比見本草本草  
名本草をり和名二字寫脱せるものなるべしさて今和名  
本草を見るよ牟末乃久保加比とあるハ字を半誤寫せ  
ハ正しき本よ源順の引とる時など漢語抄日本紀私記本朝

式辨色立成和名本草等の書を引とるよはいづれも字麻  
と見えかの深江輔仁和名本草よも驢を和名字佐岐字末  
と見えとるを合せ考るよその前ハみなる字麻なりとを天  
曆の頃よ至りてハ既く誤りて無麻とせしもの同抄よ駱駝  
良久太乃字万鱧腸草和名字末木太之馬令來の義食槽和名  
字麻乃岐保祢とあるのみハ舊き書をも引ざるよなほ字  
麻とせるハ疑をいけきとこれらも漢語抄等よ出さるま  
まを載てとあくその引書ハ脱せるものならむ但し字を  
牟とせることハ傳寫の誤其例多きことなれば古本の和  
名抄ハなべて字麻なりけむを後よりくよ誤寫せるもの



ともあるべし。志うれども右よ云如く。順の自註せる方よ  
 へ無麻とのみ見え。舊き書を引とる方よハ。宇麻とのみあ  
 けて。きたやのよ別記とれば。なほ傳寫の誤とも定めがと  
 一。拾遺集物名よ午未申酉戌亥を。生れよりひつーつくれ  
 ば山よさるひとりいぬるよ人率ていませとあるも。宇麻  
 を唱へ誤りしものよをあらで。彼頃ハ既く午をも牟麻生  
 をも牟麻留とせるふこそあらめ。○産ハ。宇麻留。宇牟。宇米  
 留などいひしを。これをも後よ牟麻留。牟米留など書ハ。宇  
 字を書ても。後よン。マル。ン。マル。などきこゆるやうよ唱る  
 ろら。つひよ假字をも書誤めとるものなり。○埋ハ。宇母留。

宇母礼などいひしを。後よ牟母留。牟母礼など書も上よ同  
 一。○奪ハ。宇婆比。宇婆布といひしを。これをも宇字を書て  
 も。後よン。バ。ヒ。ン。バ。フなどきこゆるやうよ唱る。ら。は。ひ  
 よ假字をも誤て。既く書紀の訓などよも。ム。バ。フとある  
 ハ。ひ。ご。ことなり。○可美又可甘ハ。宇麻伎。宇麻師といひしを。  
 宇を牟よ誤ること。右の産奪などの例は同ト。○諾ハ。古  
 事記。書紀。續紀。万葉。をべて宇倍の假字なるを。後よ牟倍と  
 のみ書ハ。これも宇倍と書ても。ン。ベ。ときこゆるやうよ唱  
 ろら。ら。つひよ假字を書誤めとるものなり。和名本草よ。郁  
 核。和名字倍と見えとるを合考れば。新撰万葉よ。打吹丹秋

之草木之芝折礼者都子山風緒荒芝云濫とあるも。字倍ウバか  
とこといち志ろし。志ろるを和名抄ウバ。郁子ウバ和名牟ウバ閑ウバと  
あるハ。かの馬の例。彼頃ハ既く字ウバを牟ウバ誤ウバとことり  
つるし。これウバ和名抄ウバよりて。右の歌の郁子ウバを牟ウバ倍ウバと唱  
ることも思ふハいとウバ。但多識編ウバ。郁李ウバ和名字倍ウバと  
見えとる。此書ウバといと後のもウバ此ウバなるす。字倍ウバとあるから  
を。和名抄ウバも。元ハ字閑ウバとありけむを。後人傳寫の誤ウバても  
あるべき。又ハ多識編ウバ。和名抄ウバより前の正ウバき古書ウバ  
見えとるま。を取て。志ろるせよもあらむ。○薔薇ハ。万葉  
ハ字万良ウバと見え。和名本草ウバ。營實ウバ一名。牆薇ウバ一名。山棘ウバ和

名字波良ウバ乃美ウバ。拔蕪ウバ和名云ウバ。一名。於保ウバ字波良ウバなど見  
えて。字万良ウバ字婆良ウバの假字なるを。後ハ無波良ウバと書ハ。これ  
も字婆良ウバと書ても。ハ。ラウバときとゆるやうウバ唱ウバるみら。つ  
ひウバ假字ウバをウバ書ウバ誤ウバめウバとるものなり。和名抄ウバ。營實ウバ薔薇子  
也。和名無波良ウバ乃美ウバ。まウバ常陸國茨城郡牟波良ウバ岐ウバとあるハ。  
彼頃ウバ字ウバを牟ウバ誤ウバとること。前の馬の例のごとウバ。これウバを  
いウバむらと云ハ。魚ウバをイウバ。をウバべて麻行ウバと波行ウバの濁音ウバとよつ  
つくとウバきハ。字ウバを音便ウバとウバときとゆるやうウバ唱ウバることな  
。上の件ウバの言ウバども皆志ウバあり。○抱ウバハ。現報靈異記ウバ。抱ウバ于  
田岐ウバと見え。言義ウバも。腕纏ウバの約ウバとウバるものよて。切ウバ假字ウバ字ウバ

太<sup>ダ</sup>久<sup>ク</sup>なり。西行が撰集抄よハ。ことよ古言を用て書ること  
多<sup>タ</sup>きよ。それよも。身をさをやあよるて鞠<sup>マ</sup>をうごき侍る  
べしと書り。あゝるを。此言を中昔の物語書どもよ。いどく  
とのみ書てあるよつきて。いどくと云を古の  
雅言と意得て。古書よても志<sup>シ</sup>訓<sup>ク</sup>いひあことる。いどく  
い<sup>イ</sup>うどく<sup>ク</sup>の訛<sup>シ</sup>なること。魚<sup>イサ</sup>をイ<sup>イ</sup>フといふよ同例<sup>ドウレイ</sup>なり。土左  
人<sup>ヒト</sup>ハ今<sup>イマ</sup>ひうどくと云り。されバ古書よてハ。いづくよても  
これ古言の在<sup>ア</sup>れるなり。ウ<sup>ウ</sup>ダクと訓<sup>ク</sup>べきことなり。然るよこれを集中十四よ。武<sup>ム</sup>太<sup>ダ</sup>  
伎<sup>キ</sup>とある。これホよりて近<sup>キ</sup>頃の古學者ひとへよ武<sup>ム</sup>太<sup>ダ</sup>久<sup>ク</sup>と  
いふを。古の雅言との意得るも又非<sup>ヒ</sup>なり。そもく武<sup>ム</sup>太<sup>ダ</sup>久<sup>ク</sup>  
を。身<sup>ミ</sup>抱<sup>ダ</sup>と云ことよて。又一の詞と思えるれば。か此<sup>コノ</sup>梅<sup>ウメ</sup>を牟<sup>ム</sup>  
米<sup>メ</sup>馬<sup>マ</sup>を牟<sup>ム</sup>麻<sup>マ</sup>よ誤<sup>ア</sup>り類<sup>レイ</sup>よ。宇<sup>ウ</sup>太<sup>ダ</sup>久<sup>ク</sup>を訛<sup>シ</sup>れるものよハ。あら

ねど。人のまどふことなれば。こゝに上<sup>ウ</sup>にね<sup>ネ</sup>ある以上  
宇<sup>ウ</sup>と云方是<sup>シ</sup>ク。牟<sup>ム</sup>といふ方非<sup>ヒ</sup>き例<sup>レイ</sup>どもをあつむ。太<sup>タ</sup>五<sup>ゴ</sup>ハ  
○鱸<sup>ササガ</sup>ハ。方<sup>カタ</sup>葉<sup>エフ</sup>。和名本草。和名抄等よ出て。假字武<sup>ム</sup>奈<sup>ナ</sup>伎<sup>キ</sup>と見え。  
名<sup>ナ</sup>義<sup>ギ</sup>も胸<sup>ムネ</sup>鰓<sup>イサ</sup>なるを。後世<sup>ゴセ</sup>をべて宇<sup>ウ</sup>奈<sup>ナ</sup>伎<sup>キ</sup>と唱<sup>ナ</sup>るハ。誤<sup>ア</sup>りさる  
ものなり。これハ麻<sup>マ</sup>行<sup>コウ</sup>と波<sup>ハ</sup>行<sup>コウ</sup>の濁<sup>ダク</sup>音<sup>オン</sup>とよて承<sup>ウケ</sup>ざれば。ン<sup>ン</sup>ナ  
ギとよきこゆるやうよ唱<sup>ナ</sup>ることハ。なきをいふな  
る故<sup>ユ</sup>よて。訛<sup>シ</sup>れるものよ。あら○五<sup>イ</sup>茄<sup>カ</sup>ハ。和名本草。和名抄  
等<sup>トウ</sup>よ出て。假字牟<sup>ム</sup>古<sup>コ</sup>岐<sup>キ</sup>なるを。後世<sup>ゴセ</sup>宇<sup>ウ</sup>古<sup>コ</sup>岐<sup>キ</sup>と呼<sup>ヨブ</sup>ハ。訛<sup>シ</sup>りさる  
ものなるべし。○貉<sup>イノシシ</sup>ハ。書紀。字鏡。和名抄等よ出て。假字牟<sup>ム</sup>自<sup>ジ</sup>  
奈<sup>ナ</sup>と見え。今も志<sup>シ</sup>あ呼<sup>コ</sup>て誤<sup>ア</sup>つことなきを。書紀推古天皇卷  
傍<sup>ナリ</sup>訓<sup>ク</sup>よ。ウ<sup>ウ</sup>ジナとあるハ。中<sup>ナカ</sup>ごろ宇<sup>ウ</sup>よ誤<sup>ア</sup>れることよのあざし

みよりて、ある訓るもの未詳ならん。○嚴捷を續紀天平  
 神護元年正月詔し、平伎時仁奉仕己止方誰人可不奉待在  
 矣。如此久牟治方夜伎時仁身命乎不惜之天貞久淨心乎以  
 朝廷乎護奉侍流人等云とある牟治ハ、大日靈貴大己貴  
 道主貴君貴ま書紀崇神天皇卷ハ、是夜夢有一貴人など  
 ある牟治と同言と思へるれば、本のまは、牟とある方正  
 一あるべきハ、宇治方夜伎と作る本ハ、正しあらざる。但  
 一遊仙窟ハ、逆遭とあれは、うぢをやくといふ詞ハ、あま  
 たり、其ハ牟治方夜伎を訛りたる。若宇とある方正一と  
 せば、牟治方夜伎とあるハ、誤寫とせむ。本居氏詔詞解ハ、  
 印本ハ、牟とあ

るを誤とし、宇とある本を正しと詳しハ、辨へおとし、鎮火  
 せれど、強し其と決むべし。伊勢物語蜻蛉日記等ハ、いぢやくと  
 詞ハ、御心一速比又伊勢物語蜻蛉日記等ハ、いぢやくと  
 あり、なるとも、同言ならハ、うぢをやくを訛れるものなるべ  
 し。うをいと云と、同例なり。○日向國ハ、書紀ハ、假字辟武伽  
 と見えて、實ハ、志ハ、呼べき理なるを、和名抄ハ、日向比字加  
 とあるハ、字ハ、牟字の誤寫ならむ。但ハ、かの頃ハ、既ハ、音  
 便ハ、類れて呼るを、そのまは、志るせる。後世ハ、おあ  
 べて比字加とのみ呼べ、これハ、言の中ハ、ある牟を、音便ハ、  
 て訛れるなり。下の多武峰ハ、談字をむかきて、多武な  
 ること論なきハ、これをも後ハ、とうのみねと呼ハ、音便の  
 類なり。○峠ハ、万葉ハ、出で、假字多武氣なるを、後世ハ、  
 なる

べてとうげと呼ハ。これも音便よくづれとるものなり。以  
上牟と云方是く字といふ方非き例どもをあつむ。

吾を阿といひ和といふ事

○中ごろは慈圓僧正の吾戀ハ松を志ぐれのとよめる歌  
を。あつこひをと誦て。人よわらされさるものあり。と物よ  
志るせり。志られども古ハ。吾戀を阿我故非とのみ万葉の  
假字よも見えて。さのみ見らふべきことよハ非ざれども。  
その頃阿我と云ことハ。人の耳るれざること故まわらへ  
るなるべし。げは古今集よりこの方ハ。古く阿我と云こと  
とを。おしるべし。和我とのにいへり。と見ゆれば。阿我

と云むハ。ことやうめきてきこえしよこそ。されども物語

書よも。あつ君。あ子。或いあれよも。あらば。或いあれよのこ

とちして。なとやうまいへること多ければ。むげよいとさ

りしことよハ。あらざめきど。うるはしき歌などよハ。よま

ざりしことなるべし。其ハとまれ。中ごろより以降めこと

るれば。古書よまむよハ。古よつきて考べきことなり。さて

古ハ。阿とも和とも互よいへまば。いづれよ云ても苦しか

らぬこと。思ふハ。下りしりのことよて。深く考へざるが

故なり。古とても阿といひるれしをバ。阿とのみいひ。和と  
いひるれしをバ。和とのみいひしこと。見えて。吾王ると

いふ吾をバ。和とのみいひて。阿といへることなく。吾戀ふ  
 ど云吾をバ。阿とのみいひて。和といへることなく。と見え  
 らう。いづれもそゆゝ連く言ふよりて。云るれらうことあ  
 りと思さるれば。古書よむも。自昔風の歌よまむも。そ  
 の心をべきよこそ。故今古事記書紀よ出さる歌。万葉集中  
 阿とあると。和とあるとの假字書のかぎりとづね聞るよ。  
 阿といへるよかぎりさる言と。和といへるよかぎりさる  
 言と。又阿和両通の言あり。左よ擧さるを見て考べし。  
 ○わがおほきみ。古五處。紀四處。○わがおほきみ。万九處。○  
 わがちしは。万一處。○わがは。万一處。○わがせ。紀一處。万十四

處。但古事記仁徳天皇條よ一處。阿賀勢能伎美と見えたり。  
 めづら。九。吾王。吾父。吾母。吾夫。吾妻。などいふ吾を。阿とい  
 へるハ。右の一。○わがせ。紀一處。○わがせ。万五處。○わ  
 ぎも。古一處。紀一處。○わぎも。万廿二處。○わがいも。万  
 處。○わぎめ。万一處。○わがつま。古一處。紀一處。○わが  
 古。○わがめ。万一處。○わがへ。万二處。○わがへ。古  
 つま。万一處。○わがる。古一處。○わがへ。万二處。○わが  
 妻。紀二處。○わがいはる。万一處。○わがかど。万二處。○わが  
 万二處。○わがやど。万十處。○わがいのち。紀一處。○わが  
 門。○わがり。万二處。○わがいのち。紀一處。○わが  
 さと。万一處。○わがを。万一處。○わがとび。万一處。○わが  
 さかり。万一處。○わがゆき。万一處。○わがとくし。古一處。○わ  
 さび。万一處。○わがゆき。万一處。○わがとくし。古一處。○わ

がきぬ 万一處 ○わがそて 万一處 ○わがも 万一處 ○わが  
 かづら 万一處 ○わがふね 万一處 ○わがゆゑ 万四處 ○わ  
 がから 万一處 ○われつく 万一處 ○わがへ 万一處 ○ます  
 らわれ 万一處 ○わはもふ 万一處 ○われまつ 万一處 ○わ  
 のとせれば 古二處 ○わがむれいなを 古一處 ○わがひ  
 けいなば 古一處 ○わがいねし 古一處 ○われは日をれど  
 古一處 ○われそやゑぬ 古一處 ○わがさけるため 古一處  
 紀一處 ○わがふらりねし 古一處 ○わがけせる 古一處 ○わがお  
 きし 古一處 ○わがみきららば 古二處 ○わがいませば 古  
 紀一處 ○わがみし 古一處 ○わがゆくみちの 古一處  
 紀一處

○われゑひしけり 古二處 ○わがもことよてむ 古一處 ○わ  
 らくよみれば 古一處 ○われわれれめや 古一處 ○わがの  
 ぼれば 古二處 ○わがみがほし 古一處 ○わがさちみれば  
 古一處 ○わがとふいもを 古一處 ○わがなくつま 古一處  
 ○わがにげのぼりし 古一處 ○われをとすふ 紀一處 ○  
 われはききり 紀一處 ○わがめづるこら 紀一處 ○われい  
 しまし 紀一處 ○われよまかしめ 紀一處 ○わがみせば 紀  
 處 ○われはねしかど 紀一處 ○われをひきれて 紀一處 以  
 上 ぬれ和との云て阿と通用とることあり  
 ○あがをめかみ 万一處 ○あぎ 古一處 ○あがぬし 万一處  
 紀一處

○あせを古二處 ○あがおくづま万一處 ○あがはしづま古一處 ○あがわのきこを紀一處 ○あご吾子 紀四處 ○あがこ  
 ま万二處 ○あがおわくに古一處 ○あがおも万一處 ○あ  
 がもて万一處 ○あがこま万一處 ○あがこひ面 万六處 ○あ  
 があ面 とむ万一處 ○あがかとこひ万一處 ○あがとめ万  
 處 ○あがころも万一處 ○あがしところも万一處 ○あが  
 むね万一處 ○あがどここのべ万一處 ○あがおほくろ大黒 處万一  
 ○あがみしこよ古一處 ○あれもふ万一處 ○あがもふ二古  
處 紀一處 万十一處 但十四三十一 ○あがおもふ万一處 ○あ  
二丁 一處 和賀母抱とあり ○あがまちとふよ万一處 ○あ  
 がまつむら万一處 ○あがまちとふよ万一處 ○あがま

なくに万一處 ○あはもよ古一處 ○あれハそれど古一處  
 ○あれハおもへど古一處 ○あれこそハ古一處 ○あれや  
 ーるハむ紀一處 ○あがほるとまの紀一處 ○あがかふこ  
 ま紀二處 ○あれハくるし急紀一處 ○あれまとむ万一處  
 ○あれこひめやも万二處 ○あがこふ万一處 ○あがこひ  
 めやも万一處 ○あがこひむ万一處 ○あがこひわさる万  
處 ○あがこひゆむ万一處 ○あれこひをらむ万一處 ○  
 あがこひをらむ万四處 ○あれこひよけり万一處 ○あが  
 こひのまく万一處 以上みなる阿とのみ云て和と通用する  
 ことなる





天保六年己未三月十一日

兼家野史

つぎ九井殿と書かれたりといふは

たゞ蘇の末とていふは母の國をさへし國をた  
ぢていふべし其のなほ一月の時をいふは其の國を  
てははしむるは其の國をいふは其の國をいふは  
いふは其の國をいふは其の國をいふは其の國を  
いふは其の國をいふは其の國をいふは其の國を  
いふは其の國をいふは其の國をいふは其の國を  
いふは其の國をいふは其の國をいふは其の國を  
いふは其の國をいふは其の國をいふは其の國を

